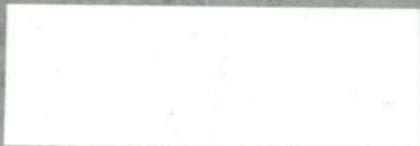




# 二反田古墓

1987

松江市教育委員会



## 凡　　例

1. 本書は、松江市教育委員会が株式会社岩崎組の委託を受け、昭和61年度において実施した二反田古墓発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査事業の組織は次のとおりである。

委託者 株式会社岩崎組 代表取締役 永田 博

受託者 松江市 松江市長 中村芳二郎

主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 荘

事務局 松江市教育委員会 社会教育課長 野津久夫

文化係長 岡崎雄二郎

指導員 宇野美智子

調査担当者 嘴託員 杉原清一

作業員 安部善則 高尾 茂 宮廻建幸 原多美子

安達早苗 石上奈利子 秋園みどり 藤原友子

遺物整理員 杉原清一 藤原友子 青木 博

3. 調査の実施については、株式会社岩崎組から多大な協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。

4. 遺構・遺物の自然科学的検討を次のように依頼した。

火葬壙の考古地磁気年代測定 島根大学理学部 伊藤晴明教授・時枝克安助教授

火葬人骨の鑑定 鳥取大学医学部 井上晃季助教授

5. 本書の編集及び執筆は主として杉原がこれを行ない、藤原と岡崎がこれを助けた。

6. 遺構・遺物の写真撮影は杉原が、図面の浄書は藤原と青木がこれを行った。

7. 実測図中の方位は調査時の磁北によった。

8. 出土遺構・遺物の検討にあたっては、多くの方々から御指導、資料提供や御協力をいただいた。記して謝意を表す次第である。（敬称略）

渡部暉夫 飯泉 滋 山内靖喜（以上島根大学理学部地質学教室）

村上 勇（島根県立博物館主任学芸員）

土江利介（宍道町上江石材店） 道上康仁（広島県立埋蔵文化財センター）

小川真登 音羽 融 原 保男 安部善則 坪倉武久（以上法吉町）

## 目 次

I	発掘調査に至る経緯	岡崎雄二郎	1
II	位置と歴史的環境	岡崎雄二郎	2
III	遺構	杉原清	9
	地形と調査の概要 第1テラス（石敷基壇） 第2テラス（石敷基壇と火葬場）		
IV	出土遺物	杉原清	22
	遺物の種類と散布状況 石塔片について 土器 宝筐印塔の比較		
V	遺構・遺物の自然科学的検討		40
A	二反田古墳焼土熱残留磁気測定結果	鳥根大学理学部 時枝克安・伊藤晴明	40
B	二反田古墳の出土火葬骨	鳥取大学医学部法医学教室 井上晃季	41
C	出土木炭の樹種判定	杉原清	44
VI	まとめ	杉原清	48

## 図 表 目 次

図1	二反田古墳の位置と周辺の遺跡分布図	3	表1	周辺の遺跡一覧	2
2	松ヶ峰古墳略測図	4	2	石敷基壇の区画	16
3	コゴメダカ遺跡出土土刀実測図	5	3	石塔破片出土集計表	22
4	白鹿谷遺跡出土石帯実測図	6	4	土器片出土集計表	23
5	調査地点付近地形図	7	5	宝筐印塔の観察	33
6	地形実測図	11	6	測定データ表	40
7	遺構平面図	13	7	二反田古墳の出土人骨	41
8	土層断面図	15	8	木炭の観察	45
9	墓壇部断面図	17			
10	火葬場断面図	20			
11	石塔片測図 1.2.3.	25, 26, 28			
12	土器測図	30			
13	宝筐印塔の比較 1.2.	34, 35			

## I. 発掘調査に至る経緯

株式会社 岩崎組は、松江市法吉町地内の 82,514 m<sup>2</sup>の山林、田、畑を切削あるいは盛土して 168 ヘクタールの宅地と道路、公園等を造成しようという計画（東洋北台団地造成計画）を立案し昭和 60 年 12 月 7 日に計画課主催の開発協議があった。

区域内には、周知の遺跡として、常福寺南側丘陵上に宝篋印塔の埋まっている古墓（二反田古墓、JO 37）が知られていたが、その他にも埋蔵文化財包蔵地があるやも知れぬということで、同年 12 月 26 日に分布調査を実施したところ、計画区域の東端部において直径 36 m 余り、高さ 4.8 ~ 5.5 m の大規模な円墳（松ヶ峰古墳と命名）を新たに発見した。

こうした調査結果をふまえ、開発協議の点検表では、松ヶ峰古墳と二反田古墓については極力現状保存の措置をとられることが望ましい旨の意見を提出した。

そこで、事業者と個別協議に入った結果、松ヶ峰古墳については、1)県内でも有数の規模の円墳であること。2)仮に調査を実施するとしてもかなりの調査費がかかる。3)区域の端部に所在し、公園緑地にあてがうことが可能。なことから、公園緑地として現状保存されることになった。

一方の「二反田古墓」については、既設の道路から団地内へ進入出来る 2 ケ所のルートの内の 1 か所であり、この基幹道路をルート変更することは困難であり、当初の計画どおり進めたいという事業者の強い意志があり、極力ルート変更されるよう説得したが、あらゆる状況から現状保存が困難な見通しとなったので、昭和 61 年度において発掘調査を実施してみることについて検討することになった。

しかしながら、昭和 61 年度における発掘調査のスケジュールは東工業団地内の調査等、既に決定しており、新たに食い込む余地は全く無かった。調査を引き受けようにも担当者がいないという最悪の事態に陥ったのである。

そこで、事業者は、日本考古学協会の会員で島根県埋蔵文化財保護指導委員の杉原清一氏に依頼し了解を得たので、杉原氏を担当者として昭和 61 年 10 ~ 11 月に調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和 61 年 10 月 1 日から 11 月 27 日までの内、33 日間を要して行った。

遺跡の所在地は、松江市法吉町字二反田 264 番地、同町字箕屋 854 番地で、土地の所有者は調査時点では常福寺（松江市法吉町 258 番地、住職、小川勉武）である。

## II. 周辺の歴史的環境

繩文・弥生時代の遺跡は、法吉遺跡、春日遺跡が著名である。法吉遺跡は、昭和初年、耕地整理に伴う灌漑用水路の掘削で遺物が出土し、昭和24年にも排水用の土管の埋設工事に際して土器片が発見されている。土層の断面は、水田面から80cm下に厚み10cm余りの灰褐色砂層があり遺物を包含している。遺物包含層の下層は紫灰色の腐蝕質を多量に含む層（地元では「オモカス」と呼んでいる。）である。遺物としては、黒土B II式平行の繩文

表1 周辺の遺跡一覧

番号	種別	名称	所在地	遺構・遺物	文献 記載	番号	種別	名称	所在地	遺構・遺物	文献 記載	
1	城跡	二反出古墳	法吉町二反出	宝塚印塔火葬墓		27	古墳	万葉古墳	美谷町	方墳		
2	〃	白鹿城跡	〃		1	28	横穴群	美山古墳群	北端町赤山	青刀、刀子、須恵器、土器		
3	〃	貞山城跡	〃		1	29	古墳	長谷徹神古墳	法吉町長谷			
4	〃	荒廢城跡	因幡町南平		1, 2	30	横穴群	なつめ谷堀古墳群	法吉町なつめ谷	法占切なつめ谷		
5	〃	史跡松江城	殿町城山		1, 3	31	古墳	白鹿谷遺跡	法吉町白鹿谷	石器1、須恵器、十脚器、鐵石1、中世陶器		
6	横穴群	月選古墳群	比佐町	竹筒、石器、鍍朱等		4	32	〃	折居古墳群	法吉町折居	円墳5基、施式石器等、縄5、辺土器、器足2-4cmの方墳、横穴式石室、須恵器、埴輪、6足籠手等	
7	横穴	横穴	比佐町	家形石棺、須恵器	5	33	〃	岡田美音古墳	法吉町88号	辺土器、器足2-4cmの方墳、横穴式石室、須恵器、埴輪、6足籠手等	12	
8	遺物包含地	田中谷遺跡	法吉町田中谷	土器類、須恵器		34	〃	松ヶ崎古墳群	法吉町松ヶ崎	円墳、追跡36m、高さ5.3m		
9	古墳	田中谷古墳	〃	全長24m、前方後方墳	6	35	横穴群	ひのさん山横穴群	東勇谷町應永	30穴以上。須恵器、土師器、3分の2前滅		
10	〃	坪山古墳	法吉町下り松	円錐、平地に立地、円錐	7	36	横穴	赤崎横穴	東勇谷町赤崎	須恵器		
11	〃	久米古墳群	法吉町久米	方墳3基	37	〃	深町横穴	西川津町	須恵器、人骨、消滅			
12	〃	西脇古墳群	法吉町唐梅	方墳4基	38	古墳	深町古墳群			円墳2基、埴輪		
13	〃	石在終原	法吉町石在	一字・石經、土器	39	〃	古墳			方墳		
14	遺物包含地	法吉遺跡	法吉町尾張	繩文器、弥生（前中後）、土器等	8	40	〃	福山古墳群		方墳3基		
15	横穴群	比佐が崎	比佐の比佐	須恵器、須恵器	41	〃	古墳			方墳		
16	遺物包含地	中代遺跡	春日町中代	古式土器等	42	〃	春田丘群			方墳10、不明1		
17	〃	春日遺跡	〃	弥生土器	9	43	〃	小丸山古墳		方墳		
18	横穴群	法吉小学校	豊山横穴群	須恵器、土器等	44	〃	春田丘古墳			全長約90mの前方後方墳、長さ2.5mの通縫	13	
19	横穴	摩利支天山	〃	赤色透彩土器等	45	〃	栗山山古墳			地形不明、施式石器等、14窟の須恵器、鏡、有孔円筒	14	
20	古墳	新宮古墳	春日町新宮	円錐（石室か）、直径5m、高さ4.1m	10	46	〃	史跡金崎古墳群	西川津町金崎	前方後方墳2、方墳9	15	
21	〃	佐宇牟加知余都婆古墳	春日町鶴谷	円錐、直径20m	47	遺物包含地	西川津遺跡			西川津町南嶺、須文、切刃、土器、須恵器、他	16	
22	〃	内間氏之助宅	春日町古坂	円錐、直径25m±?、高さ4m	11	48	〃	タチチャウ通り	西川津町坂町他		17	
23	〃	山鹿古墳群	法吉町山鹿	円錐2	49	古墳	山崎古墳	西川津町山崎	辺19mの方墳、基壇、排水溝、人骨、土器等	18		
24	〃	栗元古墳	法吉町栗元	円錐	50	〃	栗占群	西川津町栗元	丘頂部作成第一中堅の住居、土器、須恵器、土器等、骨董品、土器等、骨董品、土器等	19		
25	横穴	栗元横穴	〃		61	集落	堤御遺跡	西川津町堤御	土器等、人骨、土器等	20		
26	古墳	燒附倉古墳	春日町	円錐、消滅								

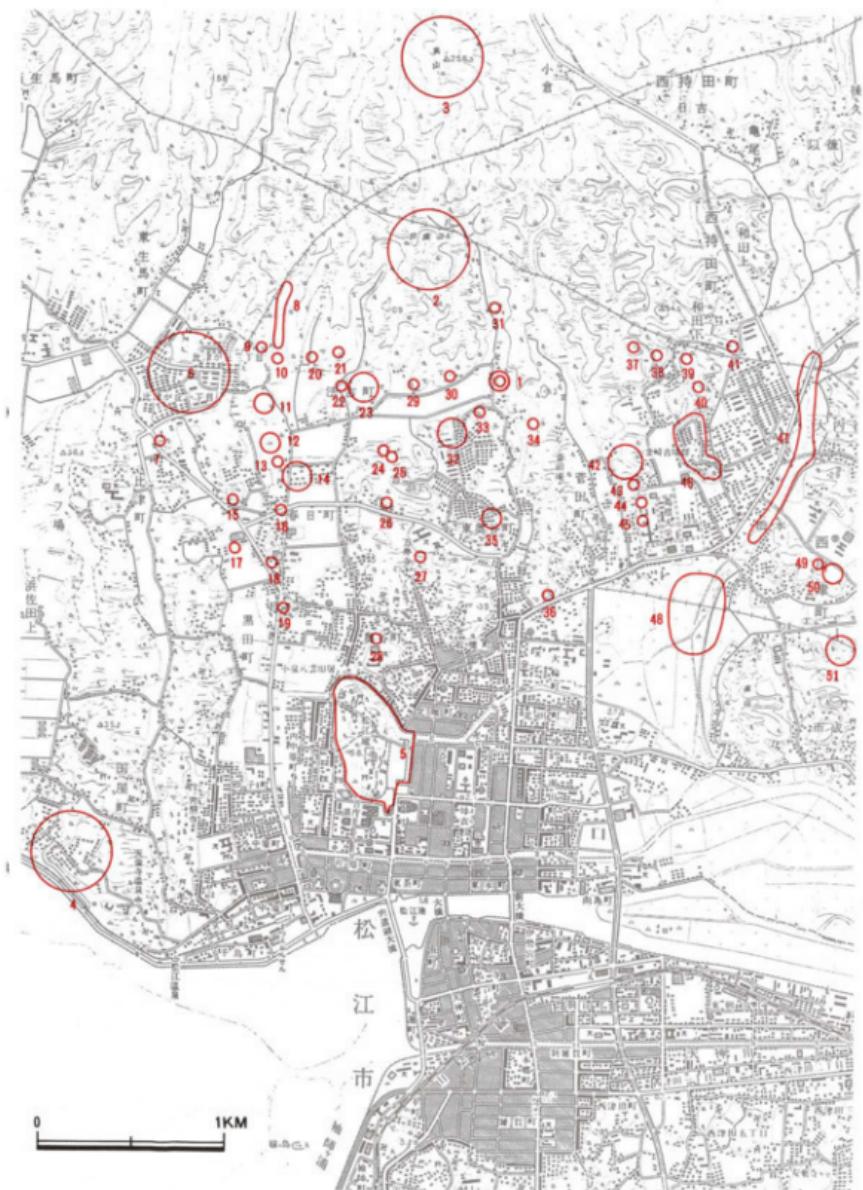


図1 二反田古墓の位置と周辺の遺跡分布図

晩期、弥生前期初頭から中期の弥生土器、石鎌、土鍬などが発見されている。

最近では、昭和57年度に範囲確認のための発掘調査を実施したが、縄文中期後半から後期前半頃の山形口縁の鉢、甕の破片や晩期頃の粗製無文の壺形土器の胴部の破片、弥生中後期の破片が出土したが、遺構は確認出来なかった。

古墳時代になると、山あいの谷間に田畠に開発され遺跡の数も増加する。

中代遺跡は、昭和49年に都市計画道路3・4・23号線（いわゆる北循環線）にかかり調査したもので、古式土師器や黒曜石の石鎌が出土している。

中期頃の遺跡は、法吉地区では明確ではないが、比津小丸山古墳、田中谷古墳のような前方後方墳や松ヶ峰古墳をはじめとする大～中規模の円墳は、他の例からして中期頃の可能性が強い。

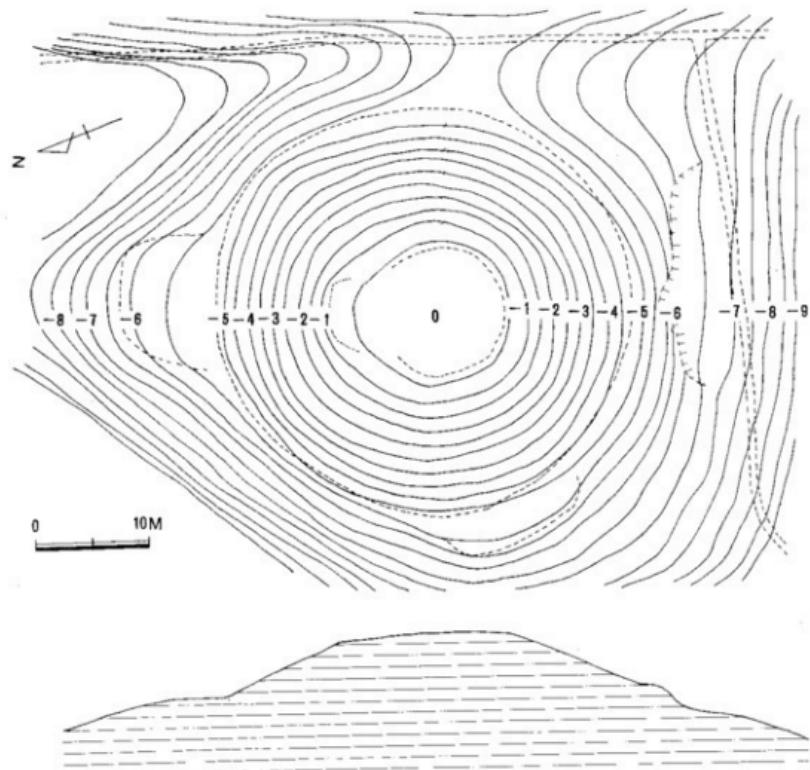


図2 松ヶ峰古墳略測図

後期に至ると、昭和59年に島根県教委が調査した岡田薬師古墳がある。これは一辺12m前後の長方形の方墳になるようで、左壁残存長3.31m、奥壁部幅1.1m、同部高さ1.04mの横穴式石室を有する。副葬品は、須恵器類、玉類がある他、墳丘盛土中途の面から須恵器蓋坏が出土し、何らかの祭祀行為に基づくものと考えられている。

又、横穴も多数構築されるようになり、ひのさん山横穴群のように30穴以上になる大規模なものもある。

又、本遺跡の東方に目を転ずると、川津地区には西川津遺跡やタテチョウ遺跡のように縄文・弥生から歴史時代に至る低地遺跡が確認されており、陶器や石劍、銅鐸舌様石製品の他、木製農耕具類、同木製品が大量に出土している。

又、古墳は、島根大学周辺の丘陵上に史跡金崎古墳群や菜師山古墳、皆田丘古墳が著名である。この内、5C末から6C前半にかけての金崎古墳群は方墳9基、前方後方墳2基、計11基から成る。1号墳は、5世紀末の全長32mの前方後方墳で、後方部に横穴式石室を有し山陰地方I期の須恵器類、玉類、刀劍類、鏡の他、滑石製子持勾玉が1点副葬されており注意される。

中世以後の遺跡についてはあまり分かっていない。経塚として山櫛経塚が3基集中している。又、コゴメダカ遺跡は、脇差1口と宋銭と明銭が出土し古墓と思われている。

室町時代後期の城郭としては、白髮城跡と真山城跡が代表的である。特に白髮城は尼子十番の一つとして、富田城に次ぐ尼子氏の重要拠点であり、山中鹿之介や松田左近が播居していた。

今回の二反田古墳は、尼子・毛利の攻防戦の舞台となった真山城、白髮城のふもと、あるいは出入口にあたり、密接な関連があるものと思われる。

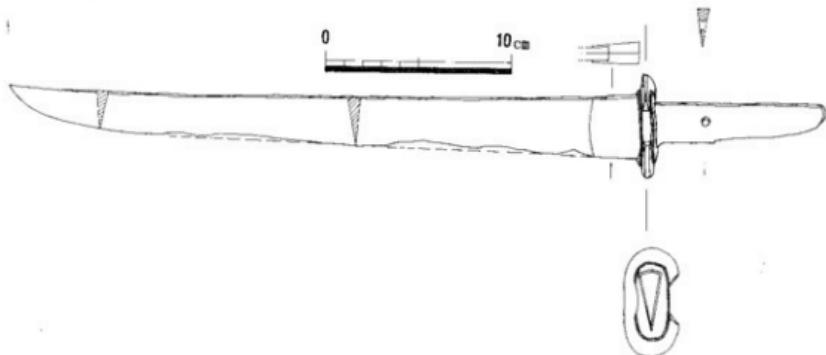


図3 コゴメダカ遺跡出土脇差実測図

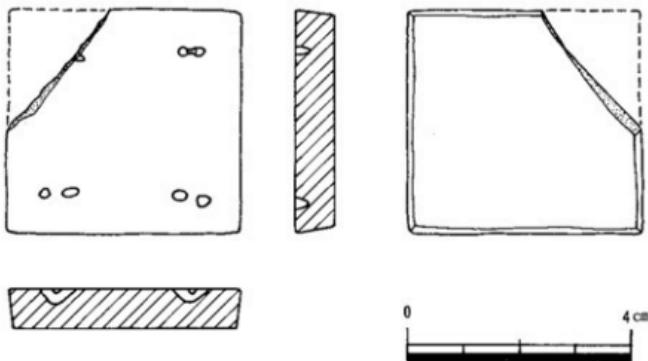
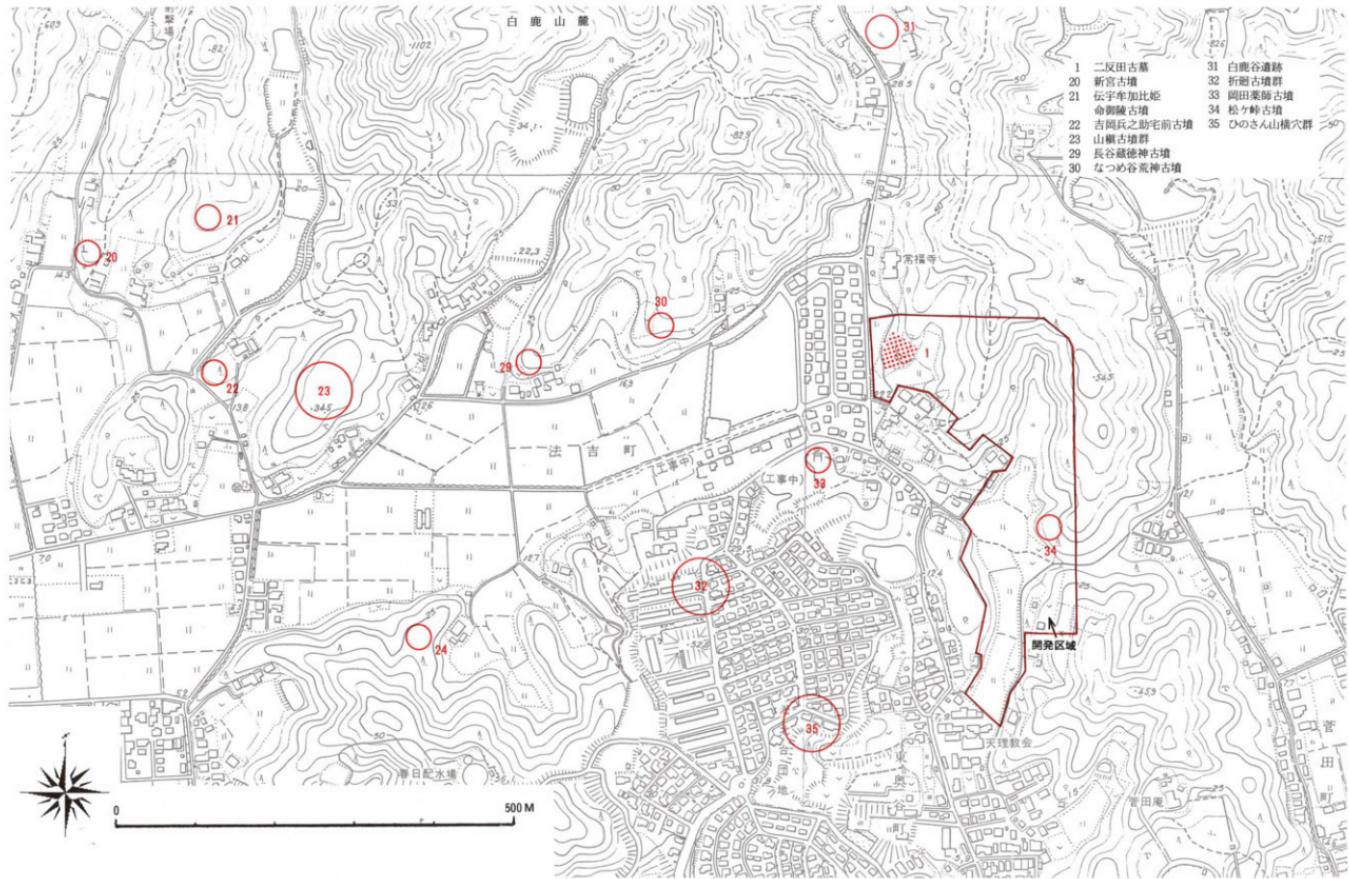


図4 白鹿谷遺跡出土石帶実測図

文献註

- 1 新人物往来社「日本城郭大系14 鳥取・鳥根・山口」昭和55年4月
- 2 松江市教育委員会「荒岡城跡」1982
- 3 松江市教育委員会「史跡松江城」1986年3月
- 4 前島己林「月廻古墳群」(日本考古学協会編『日本考古学年報』25) 昭和49年3月 所収  
宮沢明久「月廻古墳群」(日本考古学協会編『日本考古学年報』27) 昭和51年5月 所収)
- 5 山本清「山陰の石棺についてⅢ」(鳥根大学『山陰文化研究紀要 第10号』昭和45年3月 所収)
- 6 本庄考古学研究室「出雲的主要古墳一覧」(山本清先生喜寿記念論集刊行会『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』昭和61年10月 所収)
- 7 山本清「山陰国における方形墳と前方後方墳について」(鳥根大学『鳥根大学論集(人文科学)1号』昭和26年3月 所収)
- 8 鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館「八雲立つ風土記の丘研究紀要 I 弥生式土器 本編」1977
- 9 註8に同じ。
- 10 註7に同じ。
- 11 註7に同じ。
- 12 鳥根県教育委員会「岡田薬師古墳」1986年3月
- 13 山本清「鳥根大学敷地薬師山古墳遺物について」(鳥根大学『山陰文化研究紀要 第17号』1977年3月 所収)
- 14 山本清「鳥根大学敷地薬師山古墳遺物について」(鳥根大学『鳥根大学論集(人文科学)5号』昭和30年2月 所収)
- 15 松江市教育委員会「史跡金崎古墳群」昭和53年3月
- 16 鳥根県立博物館「西川津遺跡の出土品よりみた古代出雲人のくらし展」図録 昭和61年8月
- 17 註8に同じ。
- 18 松江市教育委員会「山崎古墳」1984年3月
- 19 松江市教育委員会「柴古墳群」1985年3月
- 20 松江市教育委員会「堤掘遺跡」昭和61年3月



### III. 遺構

#### 1. 地形と調査の概要 (図5) (図6) (図7) (図8)

二反田古墳は、松江市の北・新山城跡のある山頂から南へ長く張り出す尾根の先端に位置する。法吉町の北辺にあたる常福寺谷へ舌状に張り出す地形で、中世以来の法灯を守る  
註1常福寺の裏山にあたり、岸下の谷地面から8~10mの比高がある。

調査の対象としたのは尾根先端部の丘陵約30×30mの範囲であり、現地は緩やかに西及び南への斜面である。

調査作業は地形測量のうち、地形に準拠して方眼区を設定し、トレンチ及びグリッドを設けて遺構・遺物の範囲を把握確認し、それによって遺構の全発掘を行うこととした。調査区の基準方向は、磁北に対してN 1° 00' Eである。

調査区は5m方眼とし、経線を東から1~7、緯線を北からI~VIIを付して表示することとした。西斜面のIII-2~-6, IV-6~-7の各区には2×2mのグリッドを、南斜面についてはIV~VIIについて-1~-5の各列に、幅1mのトレンチを設けて試掘した。

この丘陵の自然土層についてみると、地山は黄橙色(7.5 YR 7/8)の重粘質土で、斜面下方ではその上に自然流下した堆積土(にぶい赤褐色(5 YR 5/4))があって、その上には極く薄い表層土(腐朽~腐植土)が被っている。

西斜面ではほぼ全域が自然土層のままで人工の加工痕はみられず、わずかにII-4区あたりに株掘り跡の陥没穴がみられた。これは数十年前以前松根油採取のために松の株を掘ったものである。そしてこの株抜穴の一つには石塔の破片がまとめて投入されたものがあったが、これは当該遺跡を発見した昭和49年分布調査の際に地表面に散布していたのをまとめて埋めておいたものである。

稜線に沿った西側部分には北方向尾根筋を真山城跡へと登ってゆく山路があり、路幅50~60cmで凹む踏圧された路面が認められる。

南側斜面には、斜面中腹のIV及びV列に相当して削平された帯状のテラスが長さ約22mにわたって2段造成されている。上段テラス(以下第1テラスと呼ぶ)には全長域に亘る石敷基壇があり、破片となった石塔が散乱していた。流入土も浅く、表土も薄いことから部分的に石材が地表に露呈していた。また表土中には土器の細片を若干含んでいた。

下段のテラス(以下第2テラス)はより幅広で、その前端部は東寄りでは後削り去られて崖となっている部分もある。流入堆積土もやや厚く、第1テラスから転落した石塔片や石材もあり、これを除くと地表面には炭灰の詰ったビットが認められた。なおこのテラスの東端はレベルがやや高く狭くなり、第1テラスと同趣の石敷基壇が設けられていた。

トレーナによってこのように遺構・遺物の範囲が南斜面の第1・第2テラスに限定されたので、以下これについて全面発掘を行うこととした。

## 2. 第1テラス—石敷基壇—(図7) (図9) (52頁ステレオ写真参照)

この削平段は南面する丘陵斜面をカットして狭長ではほぼ水平なテラスを設けたものである。現況で斜面南北方向のカット幅1.7~2.0m, 東西は等高線に沿って約22mを測る。しかし南側は崩落しており、本来は掘削土を盛り出して均平していたもので、幅はさらに数10cm広かったと思われる。現況で削平面の面積は31.5m<sup>2</sup>である。この面は厚さ3~5cmの表土と、若干の流入土を除くと遺構面であり、テラスの北側山手の後背部に幅約50~60cmのスペースをおいて、ほぼ一直線に石敷基壇が設けられている。

この石敷構造は約2.0~2.6m毎に縁取り石同様の石材が集中し、それらによって閉まれた中は細かい敷き詰めであることからして、区画された部分の連続であり、8区画を算えることができる。さらに西端には直角に曲った方向の石組み1区画があったとみられる。

石敷きの構成は長さ約20~40cmの長形で平面のある川石を長辺を用いて縁石として据え、約2.5mおきに大き目の石を敷き並べて一区画とし、その中に3~5cm程度の細礫を敷き詰めている。しかし上記のように南側前縁部は崩落しているので正確な区画幅は不明であるが、東端に近いところでテラス前端に半ば前傾して残っている縁石からして、およそ90cm程度とみられる。

石の上面は据えられた地面から約15cmの高さで、縁石の上端はほとんど水平に据えられている。これらの石材はすぐ西側眼下を流れる小川の常福寺川で通常にみられる石材と同じであることから、これを用いたものであろう。

この基壇はかなり石材が移動散乱していて、規画性が判然としない面もあるが、小礫の集中する部分と、基壇後縁の配石列とによって大略を知ることができる。この基壇について検討するにあたって、位置を示すのに東端からの距離によって示すことにする。(IV-1点が1.0mに、IV-2点が6.0m、以下IV-3が11.0m、IV-4が16.0m、IV-5が21.0mにそれぞれ相当するものである。)

先ず後縁の石列からみると、7m付近でわずかに屈折する点があり、さらに12.4m付近でほんのわずかに角度が異っている。そして前述のように西端の18.3mから19.2mの間は、これまでの方向とはほとんど直角の方向に折れて、約2.1mの区画となっている。このほか下段テラスに一群(2区画分)があり、この遺跡の石敷基壇は、都合5群11区画より成るものと判断される。

これを表にまとめて区画Noを付すと次のようになる。

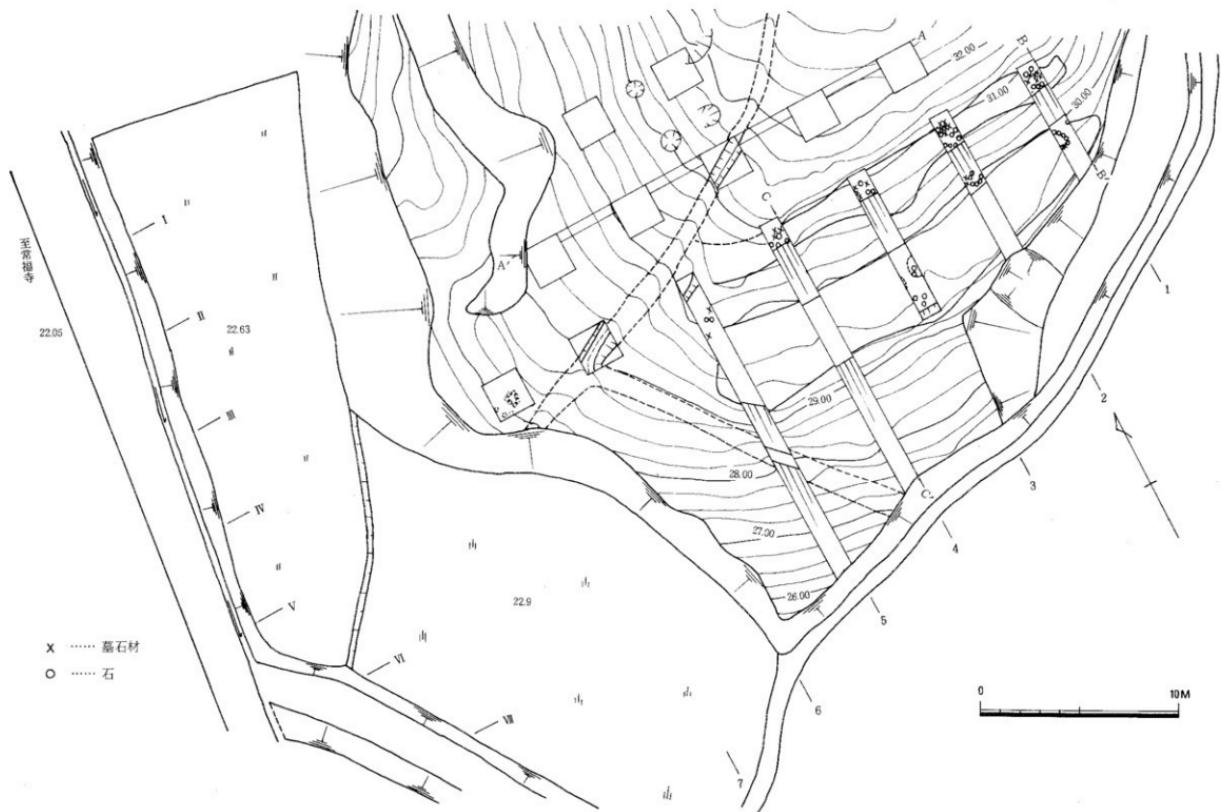


図6 地形実測図

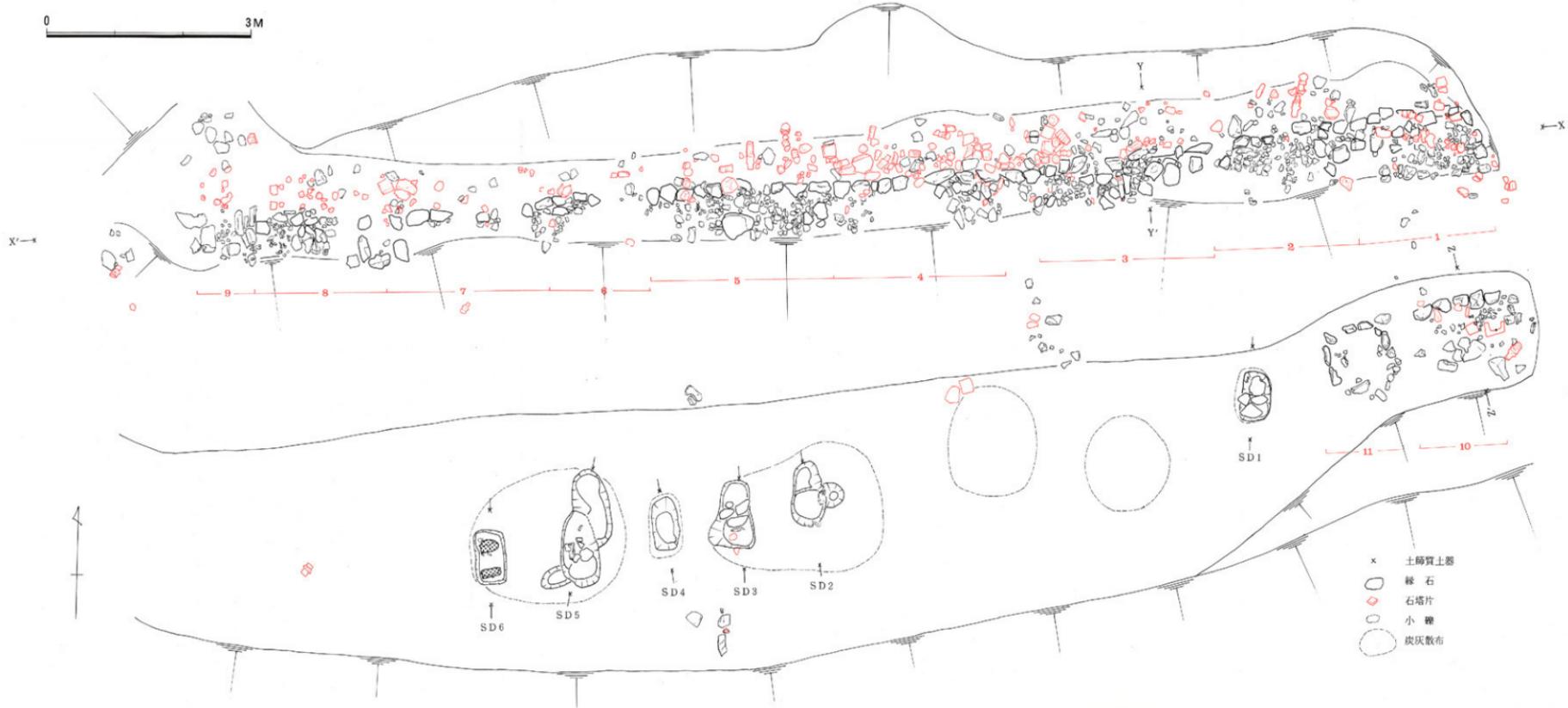


図7 造 構 平 面 図

III 総断面図

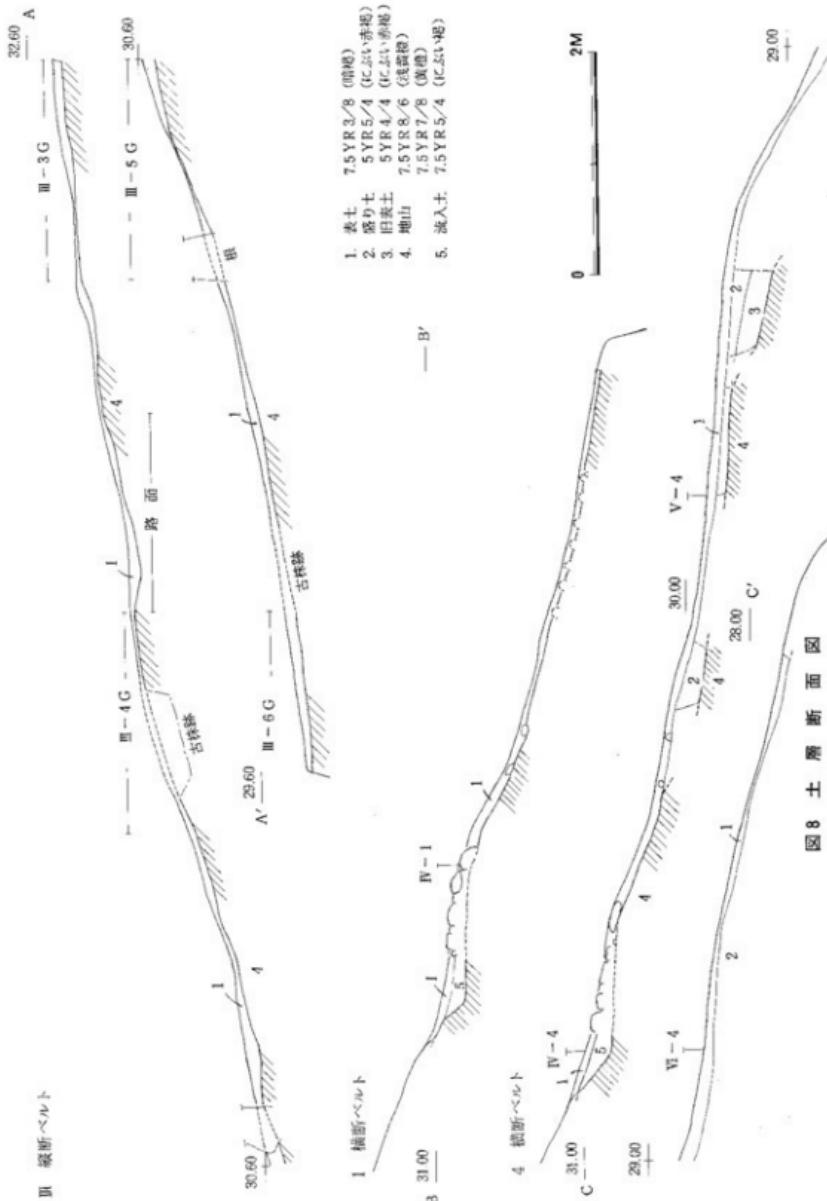


図8 土層断面図

表2 石敷基壇の区画

後石列による区分	小礫集中部位	石敷による不鮮明な部	区画長	区画No
0 ~ 7.0 m I (S 8° 00' E)	0.6	0 ~ 2.0	2.0	1
	3.2	2.0 ~ 4.2	2.2	2
	6.1	4.2 ~ 6.7	2.5	3
7.0 ~ 12.4 m II (S 5° 00' E)	8.7	7.2 ~ 9.8	2.6	4
	<10.4> 11.6	9.8 ~ 12.4	2.6	5
12.4 ~ 18.3 m III (S 6° 30' E)	13.1	12.4 ~ 14.0	1.6	6
	15.2	14.0 ~ 16.3	2.3	7
	17.8	16.3 ~ 18.3	2.0	8
直交プラン IV (S 89° 00' W)	(18.7)	(18.3 ~ 19.2)	(0.9)	9
第2テラス V (S 15° 30' E)	下第1基壇	- 0.5 ~ 0.7	1.2	10
	下第2 "	1.4 ~ 2.5	1.1	11

この列をなす基壇上やその後背の余地には主として凝灰質砂岩（米待石系）で製作された石塔の破片が多数散乱していた。これらの破片は基壇の石敷の隙間に嵌り込んでいるものや、後背部庭面にありほとんどが削り出した地山面（庭面）に密着に近い位置に散布していた。

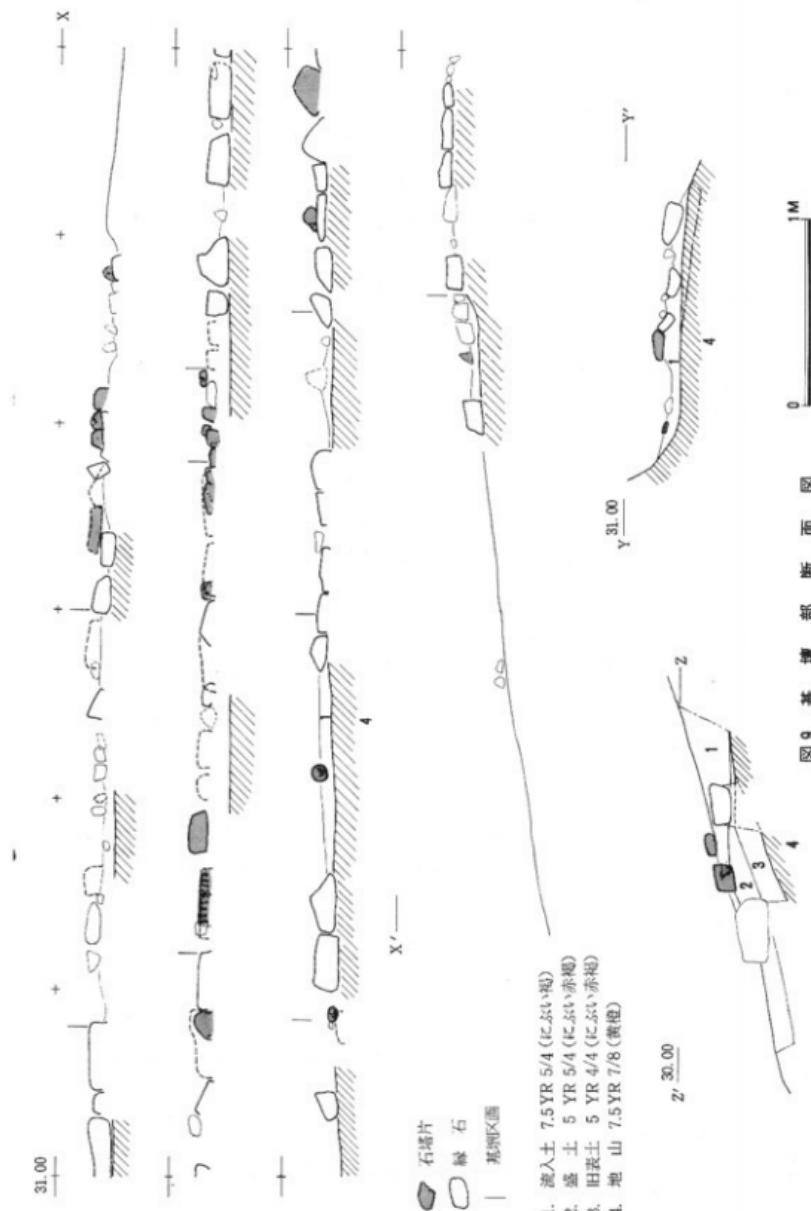
これらの石塔の破片はすべて宝篋印塔の部分であり、九輪・諸花・宝珠・或は面上に梵字を刻んだ塔身の部分などが多くみられた。

石材の破損状況は例えば縱割になった九輪や宝珠・縱断された笠部、無理にもぎとった隅脚突起、或は立方体の対角線に沿って割られた塔身、部分の不明な多数の細片などで、これは自然な破損ではなく、明らかに人為的に強く破壊したものであった。

部位別にみると相輪部が最も多く、次いで塔身や笠部があるが、基壇上に直接据えられていて最もよく残っているはずの基台部がほとんど見当らず、わずかに第2テラス部の下第1基壇に残存したのみで、そのほか基台と判別できる破片は極めて小数であり、全体として塔の上半部分がより多く残っていた。また破片を接合して原塔に復元することができるものは全くなく、わずかに部分的な接合しかできなかった。従って総数何基の石塔があったのかを破片から推定することは困難である。

破片の散乱している範囲もほとんどが基壇後半部分から後背部庭面にわたるものであり、基壇の石敷はテラス前端が沈下崩壊していることからすれば当然塔は前傾して前方に倒れるであろう。また管理するものもなく生い茂る草木の間に漸次倒壊したものならば、かつての庭面上に廃植が厚く敷いており、石塔の破片はその上に落ちて旧地面から浮いた状態

图 9 基座断面图



で埋没しているはずであるが、現況は前記のようにはほとんど地面に接して散布しているとともに人為的な一斉破壊を想起させるものである。

以上の諸点から、この遺構は第1テラスについてみるとI～IVの区割りからなり、それが石敷で2～3区画をなし、縁石で囲った中に小礫を敷き詰めて基壇が設けられている。そして各区画毎に宝鏡印塔が建ち並んだ壇域であったのが、ある日突然に人為的徹底的に破壊され、特に基台部については痕跡も残らぬほど強く破棄されたものと考えられる。

この基壇の石敷を取り除いて下部構造について精査を行った。しかし、石敷きのすべてが削平均平した地面上に設置されたものであり、掘り込みや埋納等の何らも検出できなかった。

石材はこの遺跡の所在する丘陵の下を南へ流れる常福寺川にみられる川石と同様のものであることから、これを用いたものと思われる。

なお、この第1テラスを埋めていた流入土は厚さ5cm～20cmであり、薄い表土とこの流入土層中には若干の土器片を含んでいた。採取した土器片はいずれも細片であり、主として須恵器であった。これはさらに上方の丘陵上に由来するものと思われるが、前述のようにグリッドやトレンチ調査の結果何らの遺構も検出されなかった。

## 2. 第2テラス—石敷基壇と火葬場—(図7) (図10)

第2テラスは第1テラスから1.0～1.5m下位の丘腹に造られた平坦面で、北・山手側をわずかにカットし、南・前方へ削り均した幅約3m、東西長約23mの削平面である。前面部には旧表土上にわずかに均平土の盛土が認められるが、第1テラスのように正しく水平面ではなく、前方にかなり降下するラフな平面である。

このテラスの東端部はやや急斜面の地形のところを第1テラスと同様に強くカットして幅70cmを確保してやや高目のレベルとし、第1テラスの場合と同様な石敷基壇が2区画設けられている。

またこの基壇部分から西の幅広い平面の部分には炭灰や焼石の詰った土壤が並んでいた。出土した人骨片からこれは火葬場であることが判明した。

なお第2テラスは上方からの流入堆積土がやや厚く、東端の基壇部分に流入した土中から土器片が若干採取された。これも第1テラスの場合と同様上方の丘陵上に由来するものと考えられる。

### 1) 石敷基壇

石敷の基壇はほとんど第1テラスのそれと同様の造りであるが、カットした平坦面が狭く後背部に余地がほとんどない点で異なる。

東端の区画（下第1区画）は $1.5 \times 0.8$ mで四隅をやや長手の川石を敷いて縁どりし、中に小礫を敷いている。

この基壇はその前方が沈下しているが、中央東寄りに宝鏡印塔の基台下端部が掘えられたままの状態で残存していた。これによると基台部下には3個の小礫を詰め右として挿み、掘え付けの調節を行っている。また後方寄りに相輪の破片等が散在していた。

この基台の位置からするともう1基が中心西側寄りに存在したものとみられ、一区画に2基の塔が対をなして建てられていたと考えられる。

この区画に隣接して下第2区画がある。 $10 \times 約0.8$ mの縁石のみが残っており、中に敷き詰めた小礫は完全に失なわれていた。

この第2テラスにある2区画の基壇も第1テラスと同様に下部構造は全く存在しなかった。

## 2) 火葬場

東端の二つの基壇部分からわずかに西に下ると平面の幅が広くなる。この幅広い第2テラス中央部の大部分について、表土と堆積土の上面を除くと輪郭の不鮮明な暈状の暗色部分が6か所並んでいた。その中3か所についてはそれぞれその中央部分に焼けた川石が数個まとめて落ち込んでいた。

この暗色はわずかな炭灰を含むことによるもので、さらに流入土を除き、黄橙色の地山の面まで至るとそれぞれ中央部分に炭灰や焼石の詰まった長円形～長方形でいずれも南北方向を長軸とする土壤があった。

なお東から第2・第3の暗色部分には土壤は見当らなかった。

この土壤について東からSD1～SD6として以下にその概要を記す。

**SD1**：第1テラス第2区画基壇の3.5m前方で1.3m低い位置にあたる。地山面上の表土下では炭灰混りの暗色部分が $90 \times 60$ cmほどの長円形にみられ、20～30cmほどの川石4個が嵌っていた。さらに地山面まで下げるとき $75 \times 47$ cm隅丸長方形のピットで南北に長く、川石はこの中に投入してあった。ピット内は炭灰が詰っており、深さ約15cmのピット底面はほぼ平らである。またこのピットの北西隅近くの炭灰中に上師質土器1個体分が割れて混入していた。地山に掘り込んだピットの内壁は焼熱を受けて赤橙色に変色しており、北山手寄り部分が特に顯著であった。しかしこの変色の厚さは極く薄く皮層のみである。

**SD2**：第1テラス第4～5区画基壇の前方4.0mで1.3m低いレベルにある。直径2mの暈状に暗色を呈する流入土を除くと、地山面に $95 \times 50$ cm長円形のピットがあった。焼石の小塊が落ち込み炭灰が詰っており、南寄り60cm部分が一段と深く、この部位を中心

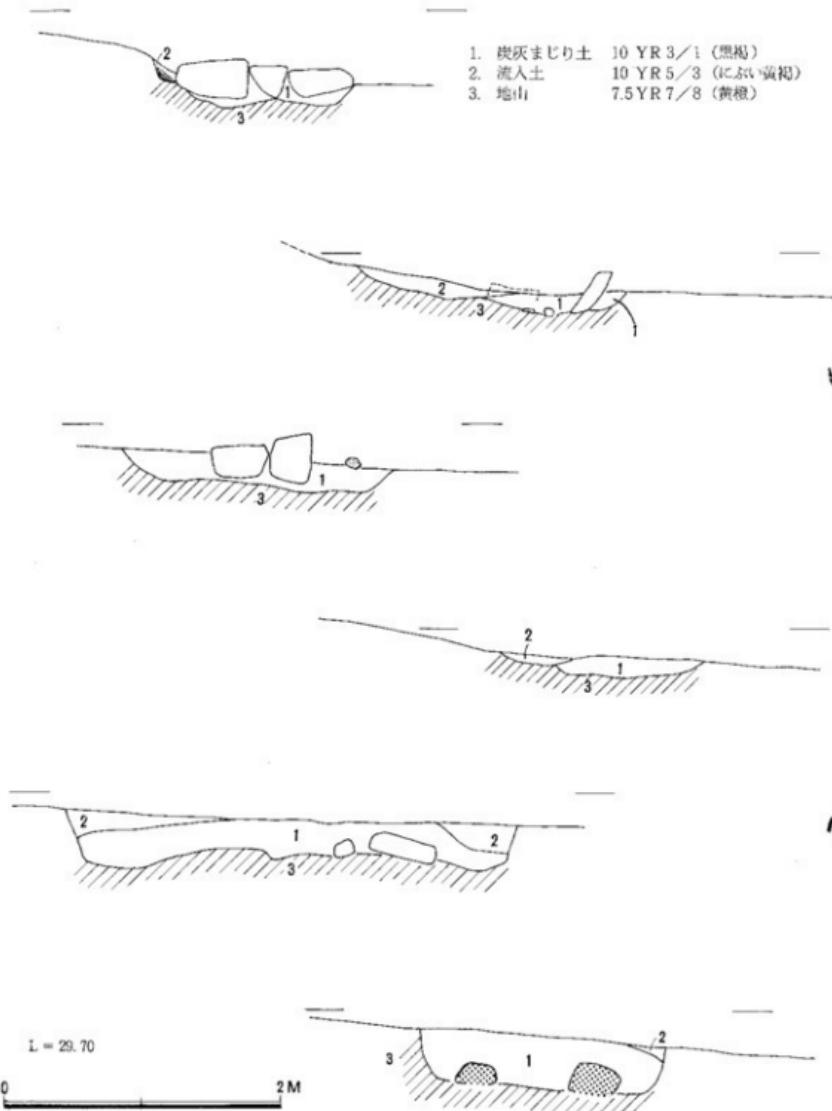


図10 火葬場断面図

に約95cm範囲が熱を受けて赤変していた。ピットの深さは最も深いところで15cmあり、緩やかな楕円の底面である。

またピットの東に接して直径30cmのわずかな窪みがあり同様に炭灰が認められた。これはSD 2 ピットに伴うのか、別途のピット最底面であるのかは不明であった。

SD 2 からは木炭片を若干サンプリングし得た。

**SD 3** : SD 2 の西約 1 m 位置に所在する。ピットは 100 × 50cm で南側がやや幅広くなる長方形で深さ 12cm の平底であり、炭灰が詰ったピット内には 15 ~ 30cm の焼けた石が 8 個投入されていた。

炭灰中には骨片が混在していた。また炭片も標本採取した。ピット内面の焼熱変色は微弱である。

**SD 4** : SD 3 の西約 1 m に位置し、80 × 40cm 長円形で深さ 10cm の底面はほぼ平坦である。このピットには焼け石等の投入は見られなかったが、内壁は赤変しており、詰っていた炭灰からは骨片が採取された。

**SD 5** : SD 4 から西へ 1.1 m に位置する。1.7 × 0.7 m を測るものであるが、これは 2 つのピットが一部重複して重なったもので、上手北寄りのもの (SD 5 N) があったところへさらに前方南寄り (SD 5 S) が掘り込まれたもので、後者には焼け石が 5 個投入されていた。いずれも深さは 12 ~ 15cm であり、底面や側面は熱を受けて赤変し炭灰が詰っていた。SD 5 S の炭灰中には骨片が混入していた。また木炭片も多くこれもサンプリングした。

**SD 6** : SD 5 S の西 1.2 m に位置し、80 × 50cm の整った方形ピットである。このピットには北と南にそれぞれ横にはほぼいっぱいになるように柱状の石が据えられておりかなり焼熱を受けていた。勿論ピット内面も熱によって赤変していた。このピットの深さは 18 ~ 20cm で底面は平坦である。詰っていた炭灰には骨片のほか炭片も多くみられた。

以上のはかピットは認められなかつたが、SD 1 と SD 2 の間にはほぼ 1.2 ~ 1.5 m の間隔で暗色暈状に炭灰混り土の部分があつた。しかし地山面以下には達しておらず、旧表土面あたりでの火熱によるものと考えられる。すると、SD 1 から東へほぼ等間隔で合計 9 か所の火熱跡が並んでいることになる。この一群のピットから採取した骨片は鳥取大学医学部井上晃孝助教授に鑑定を依頼した。その結果火葬された人骨であることが明らかとなつた。

また境内壁の焼熱を受けた部分について島根大学理学部伊藤晴明教授らに考古地磁気による年代測定を依頼した。その結果は年代の特定には至らなかつた。

採取した木炭片については別途に樹種判定を行つた。

## IV. 出土遺物

### 1. 遺物の種類と散布状況

遺構面にわたる遺物は全面にわたって散布していた石塔破片が主で369個を数える。このほかには火葬壙SD1から土師質土器が唯1点採取された。また火葬壙からは木炭片と人骨片が採取された。

遺構面の上にある流入堆積土と表土はそれぞれ極く薄いものであるが、この中からは須恵器を主とする若干の土器の細片が採取された。これら土器片は第1テラスが大部分で、総数は66片を数える。

石塔の破片と土器片の出土集計は次の通りである。

表3 石塔破片出土集計表

出土位置	基壇区画No	出土No	相輪	笠	塔身	基台	部分不明	計
第一 テラス	1	1~6	5	2	1	3	19	30
	2	7~11	11	1	0	1	2	15
	3	12~23	9	0	3	2	26	40
	4	24~45	22	5	4	13	37	81
	5	46~54	14	11	4	0	44	73
	6	55~56	3	1	0	1	3	8
	7	57~62	3	4	1	1	22	31
	8	63~64	3	1	2	0	15	21
	9	65~67	3	3	0	0	10	16
第二 テラス ↓	10	68~70	2	0	1	5	6	14
	11	なし	0	0	0	0	0	0
	その他	67~71~74	1	1	2	5	35	44
表 採		表	19	8	0	3	30	60
合 計			95	37	18	34	249	433

人骨片を採取したビット：SD3, SD4, SD5N（一部5Nも含む）, SD6

木炭片をサンプリングしたビット：SD2, SD3, SD4, SD5N, SD5S,

SD6,

なお人骨片と木炭の樹種判定は別項（V章）において報告する。

## 2. 石塔片について

### 1) 石材について

採取した石塔片はすべて宝鏡印塔の部分である。石材のほとんどは白色に近い灰色で極めて軟質でもろく、打つと割れるのでなくむしろ砕けて粉質になるような質であり、現今切り出されて用いられている「来待石（凝灰質砂岩）」より軟質白色であり、東出雲町荒島に産する荒島石に似てはいるが異なるものである。

この石材は宍道町来待で出雲石灯ろうを製作しておられる土江石材店土江利介氏によれば、同所を流れる来待川の上流にあたる佐倉地区鏡の上地区等において来待石層の上に薄く存在した石材であり、

現在ではほとんどなくなっている。今で

は来待川の流れに点々と小塊が散見される。俗称「しろこ（白粉）石」と呼ぶ凝灰質砂岩の一種であるとのことである。さらに玉湯町に遺存する舟形石棺にも同じ石材が用いられているとの教示も得た。また極く少数ではあるが、より硬質緻密で暗灰色の安山岩質の石材も用いてある。これについては確言を得なかった。

### 2) 石塔について（図11）

**相輪：**塔の最頂部である宝珠についてみると、全形の判る6点のうち5点（1. 2. 3. 7. 8.）までは直径12~13cm、高さ10~11cmで、やや横張りの姿であるが、1点（10）は直径10cm、高さ9cmと小形で、しかも直径と高さの差が少なく、やや立ち上る姿であり趣を異なる。さらに宝珠を受けている複合単弁の請花が、前者は宝珠の直径より小さいのに対し、後者は請花の直径が大である。これは姿だけでなく石材も異なっており、前者が白粉石であるのに対し、後者は安山岩質である。請花の立ち上りでも（10）は直立氣味で高く、他とは異なる。

九輪とその上に続く頸部についてみると、およそ九輪長は25cm前後であるが、上下端での直径差は1~2cmで先細りとなるものであり、輪間をつくる溝の深さと幅に若干の差異があり、それが九輪の各厚さの差異となって大きな差と感じられる。特に（10）は幅狭な溝加工で他のものとは全く異なってみえる。（16）は硬質の材を用いた中膨らみ

表4 土器片出土集計表

出土区	須恵器	土師系土器	陶磁器	計
III-0	0	0	1	1
-1	2	1	0	3
IV-0	7	1	3	11
-1	1	0	3	4
-2	14	0	0	14
-3	7	0	0	7
-4	14	0	1	15
-5	4	2	1	7
-6	1	0	0	1
-7	1	0	0	1
V-3	0	1	0	1
V-7	0	0	1	1
計	51	5	10	66

但し、このほかにSD1ピットより出土の土師質土器片2個がある。

傾向のものとなっている。

請花を支える頸部はほとんど直立するもの(1)もあるが多くの上方が外反する姿が多く、特に(10)はその上の請花の径が小さい事との関係で首太の感となっている。

相輪基部の伏鉢と請花についてみると、ほとんどが伏鉢が反花の造りとなっている。そして請花と反花はともに複合单弁を刻んで、その中間に太い輪を一重入れた造りである。異なるものとしては(25)の反花は直線的であり拡がらない単純单弁で後出するもので、(10)と石質が同じ安山岩質であり、花の開度も共通性が認められる。また、(26・27)の2点は太さも一段と細く、請花・反花ともに全く花弁を彫らず、傘状としている。この石材は白粉石である。

また宝珠の(7)と九輪部以下の(12)はほとんど同一場所から出土していて、同一個体かと思われるが、首部が破損していて判然としない。

基部の請花の直径と九輪の直径の差をみていくと、すべて請花が大きく、その上の輪がやや小さいが、その差の少ないものから大きいものまで3種類がみられる。即ち、差が1.5~1.0cmのもの(12, 11, 1, 13, 24), 2.0cm程度のもの(14, 20, 17, 18, 21, 22), 3~4cm程度のもの(26, 27, 16)の3区分ができる。

相輪について各部分の寸法をみると次のようである。

	a 型	b 型
宝珠直径～宝珠請花径	12.5 ~ 13.5cm (4.1 ~ 4.3寸)	10 cm ( 3.3寸 )
宝珠高	10.0 ~ 10.5 ( 3.3 )	9 ( 3.0 )
宝珠～請花高	15.0 ~ 15.5 ( 5.0 ~ 5.2 )	14 ( 4.7 )
九輪部高	27.0 ~ 28.5 ( 9.0 ~ 9.5 )	22 ~ 25 ( 7.3 ~ 8.3 )
基部請花・反花高	10.5 ~ 11.0 ( 3.5 ~ 3.7 )	9 ~ 10 ( 3.0 ~ 3.3 )
基部反花直径	14.0 ~ 15.5 ( 4.7 ~ 5.2 )	13 ~ 14 ( 4.3 ~ 4.8 )
納直径(≈同長)	10.2 ~ 10.5 ( 3.4 ~ 3.5 )	7.8 ~ 8.5 ( 2.6 ~ 2.8 )
平均全高(推定)(納を除く)	54.0 ( 18.0 )	46.0 ( 14.0 )

ここにb型としたひとまわり小型のものは極く少數特定のものであった。石材が安山岩質のもの(10, 25, 16)と、基部請花・反花に花弁を彫らない無文のもの(26, 27)とに限られた。これらはまた出土地点も大略第9区画及びその付近に特定されるものである。

a・bいずれにしても請花は開き気味で九輪は円柱状に近くなつた作風といえよう。

笠：塔中最も大きい石材を用いる部分であるが本体の残存しているのは2個のみで他に隅角部にあった隅筋突起の断片等である。形状のよくわかる(29)についてみると、最大幅は隅筋突起部で38cm、軒幅32cm、全高30cmを測る。底面に塔身の嵌りを浅く彫る製作

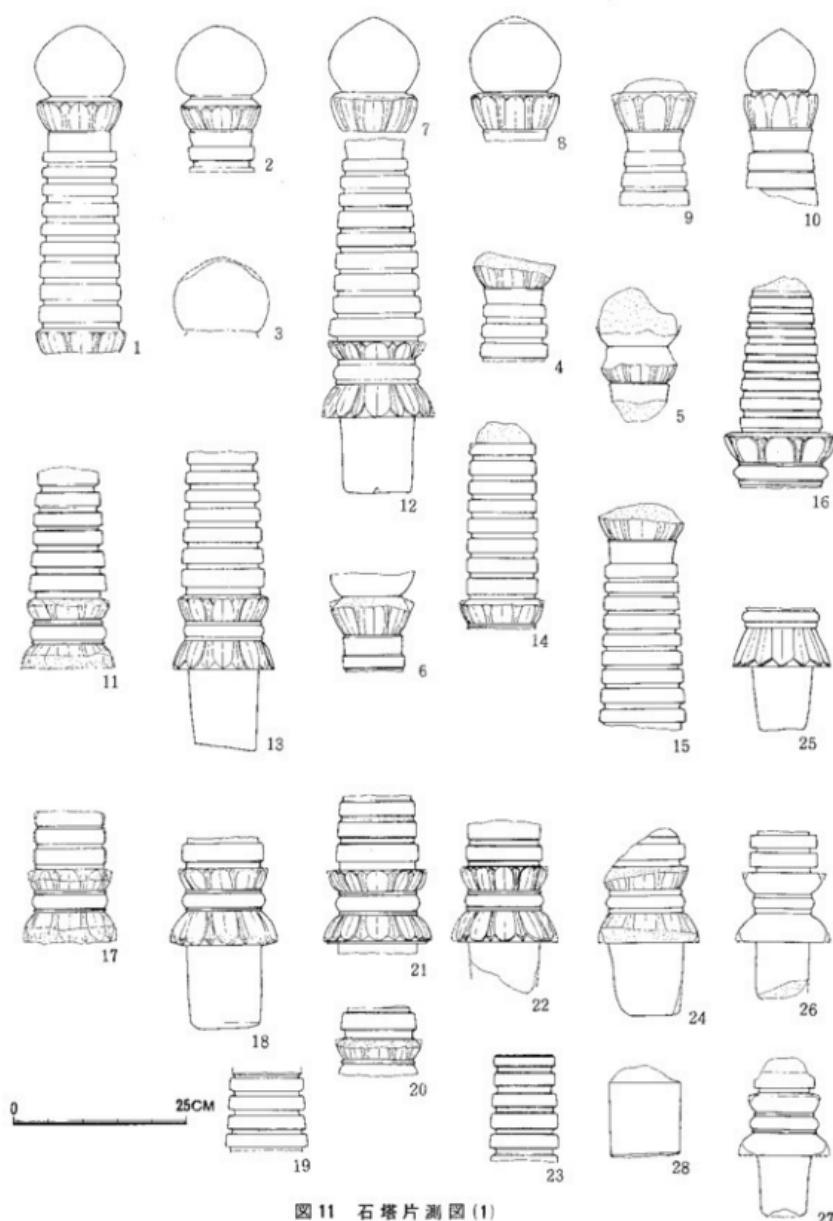


図 11 石塔片測図(1)

は軒下二階、笠上部は露盤まで四階のやや省略された全階式の造りで、隅飾突起は10cmとやや短く外開きにわずかに反り気味に立ち、縁の飾彫刻には蕨手状のCuspをつくる。軒の厚さが約10cmと特別に厚い。

(30) もほとんど同じである。相輪の柄穴は深さ11cmを測る。(32.33.34) は軒～隅飾り部の破片であり、これもほとんど同じ製作である。(32・B)には笠裏に浅い抉り込みが認められる。狭小な封入施設であろうか。

(31) は露台部分の破片である。石材は安山岩質のもので階でなく急斜する削り出しとし省階式に近い製作とみられる。柄穴直径が9cmであり、石材も同じであることからb類(25)などが適合するものとみられる。

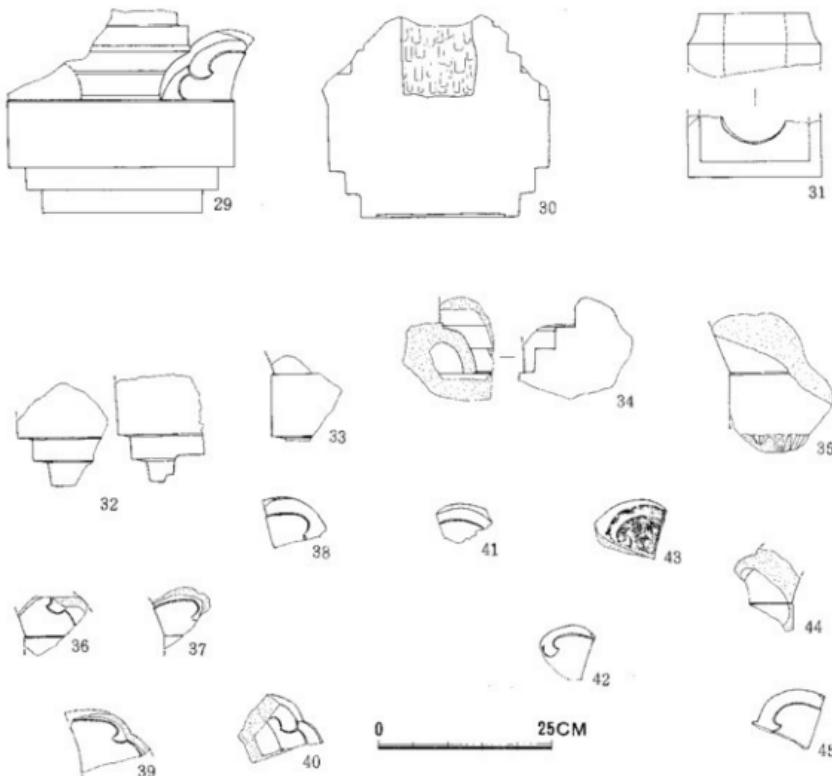


図11 石塔片測図(2)

(35) は軒下に階がなく代りに蓮弁とみられる彫刻がみられることから装飾的な蓮弁式をとり入れたものとみられ、他とは異なった様式である（26. 27）に対応するものかとも思われる。

(36～45) はすべて隅飾突起の破片で、そのデザインは(30)と全く同じである。石材では(43)が安山岩質石材であるほかはすべて白粉石である。

**塔身**：塔身は宝鏡印塔の中心となる部分で、角柱形をなし、四面にはそれぞれ梵字を刻むのか通例とする。

ここで採取した破片のうち形状寸法の測り得るものは6点である。内1点を除いて月輪に梵字種子を陰刻している。

(46)は四面ともに月輪に梵字種子を刻むもので、東西南北それぞれ金剛界四仏の種子を表す。即ち塔身自体をパン（大日如来）とし、東ウーン、南タラーク、西キリーク、<sup>註3</sup>北アクの四方仏を表現している。

薬研彫りした梵字は刷毛書き書体の明瞭な（46. 47）とやや不鮮明で肉太のもの（48. 49. 50）の二種類がみられ、後者がやや古い様相を示すとみられる。また少なくとも梵字のない面のものとして(49)は東が、(48)は西がそれぞれ無文字となっている。

(28. 50)については半裁されているため不明であり、四面ともに在るのは(46)のみである。そして四面とも無文字のものは(51)である。

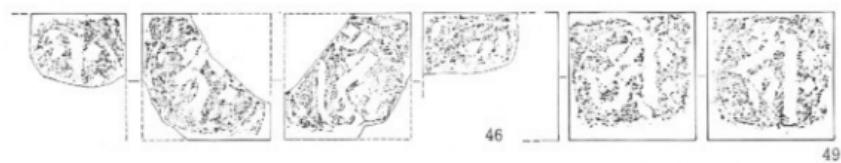
寸法は正面ほとんど正方形に造られており一辺18.0～19.0cmで、わずかに丈を高くしたもの(48)もあるが、笠部抉り込み部分に嵌るとすれば外見は正方形となるだろう。但し(51)は17.0×17.0cmとわずかに小形である。或は(35)の笠部に対応するものであろうか。いずれも上下両面をわずかに凹ませている。

これら塔身の石材はすべて軟質の白粉石である。

**基台部**：(52. 53. 54)は基台部の大破片である。(53)によってみると、底面までの高さ19cmで、塔身の座は1.5cmの段上としている。この段から基台側面へは蓮座と思われる膨らみのある斜面となっているが、蓮弁の彫刻等はなく無文である。側面は高さ10.5cmと低い平面で格狭間等は認められない。塔身の据付寸法からして基台部の幅を推定すると、塔身の両端へ各1.5cm出る塔身座であるとするならば基台底部の幅は34cmとなる。

このようにみてゆくと基台部は極端に低い姿となり、側面は10.5×34cmでしかも無文地でもあり上部に対して不均衡なものとなる。

この基台部は底面から内部が抉り抜かれており、その加工は粗で彫の痕が明瞭である。内抉りは外壁の厚さを4～5cmとしていることから24×24cmの広さと思われ、内側壁高はやや粗雑であるがおよそ外側平面の高さ以上には達する規準のようで、この(53)で



47

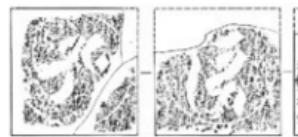
46

49

50

48

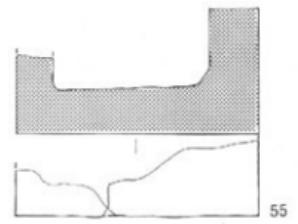
51



52

53

54



55

56

0

25C

図 11 石塔片測図(3)

は天井まで15cmを測る。(53)は下半部が欠けている。

基台上部の階段が2cmとやや高く、蓮座部分は表面が損傷を受けているが直線的な斜面のようである。その他は前者とはほとんど同様である。

(54)は内抉りについてはよく判るが、外面はすべて損傷しているためその寸法は計測できなかった。

(55, 56)は基台下端部である。特に(55)は第2テラスの10区画に据えられたままの状態で検出したもので据え付け状況の判るものであった。残存高最大11cmを測る。内抉りしたコ字状をなすものである。この台基部は据え付けられた塔の前半部分であり幅34cm向かって右側奥行は17cmで切断され、その面はやや丁寧に面仕上げしてある。この奥行は前面幅の丁度半分であることから、同寸法のもう1つを逆向きにして前後からつき合わせる二石組合わせの基台であったと考えられる。また内抉り寸法は一辺22cmを測る。つまり $34 \times 34\text{cm}$ の正方形で、高さは11cm以上の寸法となる。

この寸法は(52)の基台に完全に一致するものであり、しかも塔基台としては高さが極端に低いことも合わせ考えると、基台部は上下の二段で重ね合わせて製作されたものと判断される。このように重ね合わせ式の基台部とし、仮りに下段部分の高さを上段部の側面高と同じ10.5cmとすると、合わせた基壇寸法は $34 \times 34\text{cm}$ で、高さは側面高21cm、全高29.5cmとなる。つまり側面の長方形が10寸×7寸で均齊のとれた $\sqrt{2}:1$ の比に近いものとなる。

### 3) 塔姿の復元

塔の各部位別に観察してきたが、完形の部分は全くなく、塔全体の姿を知るには各データに基づいて図上で復元する以外はない。

ここでは当該遺跡で最も普通にみられ、大多数を占めた白粉石製で各蓮弁と梵字を彫刻した塔（相輪はaタイプのもの）を設定して図上復元した。この塔姿は各破片の散布からおよそ1～8区画に共通する姿と考える。

次の各部分別モデルを用いた。

相輪 図-1, 13 篦-29 塔身-47 基台-52, 55

先ず法量を記してみると

全高	131cm	4尺4寸	軒厚	9.8	3寸
相輪高	54	1尺8寸	塔身	18	6寸
宝珠径	13	4寸3分	基台高	30	1尺
笠部高	30	1尺	基台幅	34	1尺1寸3分
軒幅	32	1尺7分	基台内抉り	約 $24 \times 24 \times 24$	8寸×8寸×8寸

製作の特徴は

1. 全体として笠部以上が特に装飾的である。
2. 相輪伏鉢が蓮弁の反花となっている。
3. 笠部隅飾突起が外に開き、弧線が中間で卷いて尖る（Cusp）。
4. 軒が格別に厚い。
5. 塔身の種子は月輪に納まるが、ジャープな刷毛書きでやや小さい。
6. 基台が上下2段の組合せである。
7. 基台の連座に蓮弁が省略されている。
8. 全体として重心が高くやや安定感を欠く。

### 3 土 器 (図 12)

(1) は第2テラスの火葬壙 S D - 1 から出土したものであるが、その他はいずれも流入地積土又は表土中から採取されたものである。

(1) は土師質で、直径 7.4 cm、底径 5.4 cm、高さ 1.2 cm の小皿である。強く開いて直線的に短く立ち上るもので、口唇部は上面を切ったように平坦とし尖らない。底面は回転糸切りで体部・内部ともに回転などでとした大量生産した粗製品の器である。この製作法、

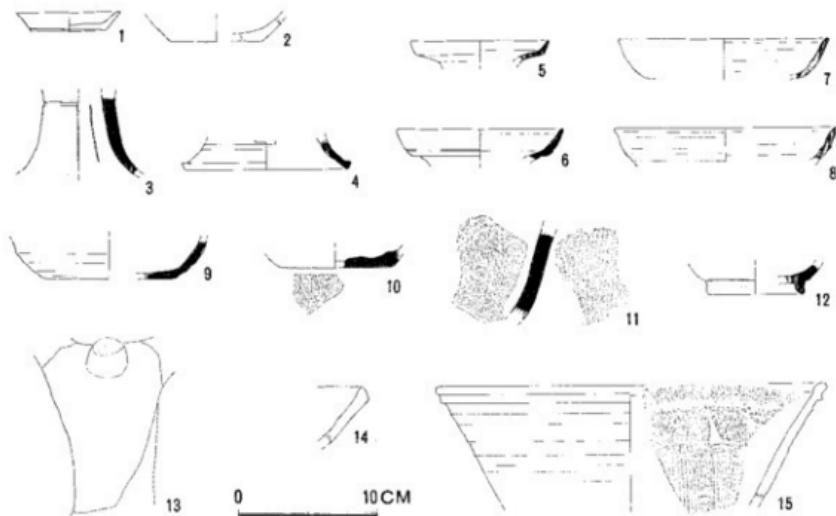


図 12 土 器 測 図

特に口縁上面を切って平坦にする手法は室町時代後半に見られるものであり、当該遺構の時代を示すものといえよう。（2）もほぼ類似する土師質土器であるがあまりにも磨耗した細片であり確實ではない。  
註4

（3）（4）は須恵器の高坏脚部の破片である。（3）は坏部下に沈線をめぐらせ、そこから下へ三方にヘラ切り直線の透しを切り込んで作る。坏部と脚端部を欠くので明確ではないが透し孔からして古墳時代末期（7世紀前半）とみられる。（4）はわずかに透し孔の下端がうかがわれる破片であり、三角形又は長方形の透し孔が想像され、（3）と同時期かわずかに先だつ時期の所産であろう。

（5）（6）は腰の口縁部とみられるもので、小形品であろう。いずれも強く聞いてわざかに立ち気味の口唇であり、7世紀代の所産と思われる。

（7）（8）は須恵の坏片である。開く口縁部で口径15～16cmのやや大きい盤であるのか高坏の坏部であるのかは不明。口唇は外反り気味に丸く收める。時期も不明。

（9）（10）は坏状の器形をなすと思われる焼成の不良な須恵器片である。底面は回転糸切りで、（9）はロクロによるなで仕上げ、（10）は粗略に指頭で削り気味に調整している。器高は低いものと思われる。この2点は平安時代の所産とみるのが妥当であろう。

（11）は須恵大盤の胸片で、内外面ともに叩目が顯著である。（12）は高台の付く底部であるが器形は不明。青灰色で焼成は良く堅い須恵質のものである。高台裏も完全になで仕上げであることから7世紀代の所産とみられる。

（13）は剥落の甚しい土製支脚である。2方の突起のほかに逆向きの小突起を有する形式のものである。器心に空洞部はない。時期は不明である。

（14）はやや灰緑色気味で焼成の弱い鉢形の器の口縁部片である。内外面ともにヨコなで仕上げのようであるが明瞭でない。瓦器であり大まかに鎌倉期ごろではなかろうか。

（15）は赤褐色で焼成良く堅い描鉢片である。横描11条の縱線を刻む。口縁の手法から註6して江戸時代の所産とされる。

このほか近世の磁器片（岡省略）もあり新しい伊万里系の碗であった。

土器類の出土はこのように細片がわずかに採取されたのみであり、しかも遺構に結びつくものは（1）の室町期とみられる土師質土器1点である。

（3）（12）の須恵器片は出土位置からして丘頂付近にあったものが転落流入したもので、7～8世紀とみられるものがほとんどである。

また（2）（14）は中世とみられるが、2点のみでその由来は不明である。

（15）はその他のものと共に近世のもので、近年まで破損物の投棄場もあったことに由来するものであろう。

#### 4 宝篋印塔の比較

出雲地方には多くの宝篋印塔が残され、また周知されている。しかしこれを調査検討されたことは少なく、石造美術品として紹介される場合が多い。<sup>註7</sup>二反田古墓出土塔を比較し検討するには、これら散在する塔の多くについて調査を行わなければならないのであるが、今回の調査の一環としては調査者の手元に所蔵する二三の資料と松江市周辺の数点についての実見略説によるものの極めて少數例について比較を行ってみた。

比較観察した諸塔は次のとおりである。

安國寺康永銘塔	松江市竹矢町安國寺庭	<sup>註8</sup>
華藏寺開山塔	〃 本庄町華藏寺本堂裏	<sup>註9</sup>
大野塔	〃 大野町西光寺裏山	<sup>註10</sup>
京極高次塔	〃 竹矢町安國寺庭	<sup>註11</sup>
牛尾氏墓塔	大原郡大東町海潮弘法寺裏山	<sup>註12</sup>
正福寺塔	飯石郡三刀屋町殿河内正福寺庭	<sup>註13</sup>
椎ノ木上塔	〃 〃 〃 椎ノ木上	<sup>註14</sup>
殿様墓塔 2基	〃 〃 納下同安寺	<sup>註15</sup>
家本墓塔	仁多郡横田町小馬木板敷	<sup>註16</sup>
下垣内古墳塔	〃 〃 〃 本谷	<sup>註17</sup>
印賀塔	鳥取県日野郡日南町印賀（県指定）	<sup>註18</sup>

以上12塔のうち大半は雲南地方に所在するため、直接の比較は問題点も多いことであろうが手元の資料によった結果である。鳥取県所在の印賀塔は年記銘のある優品であり一つの時代判定の手がかりとなるものと考えたからである。

年記銘のあるもの又は造立年代の判るものは3塔のみであり、その他は状況判断によって相当してみた。その結果、康永2年（1343）が最も古く、寛永年間（1624～）が最も新しいもので、中世の約300年間の資料である。このうちには相輪、就中宝珠部分の欠損したものもある。また15世紀後半期とみられるものはほとんど来待石を用いた小塔で、急に多数が造立されたもの一部である。

<sup>註19</sup>これらについてほぼ年代順を考える配列とし、宝篋印塔の各部分ごとにその様相・手法を表にまとめたのが第5表である。

相輪は端正に九輪を重ねた印賀塔（1358年）から、正福寺塔や華藏寺塔を経て15世紀後半には椎ノ木上塔・牛尾氏墓塔のような円柱～中膨らみ円柱状線刻となる。それが16世紀に入ると給下塔のように宝珠・諸花・伏鉢を意蘊した形となってくる。京極塔は当地の工人によるものでないとの事で直接地域のものと比較することは問題であろうが、九輪の表

表5. 宝鏡印塔の觀察

所 在 地 塔 名	國 番 号	相 宝珠 九輪 諸花 伏体	輪 輪 諸花	輪 輪 諸花	部 部 諸花	梵字 輪 諸花	梵字 輪 諸花	基 輪 諸花	通座 輪 諸花	台 輪 諸花	年代 輪 諸花	石 材 輪 諸花	全 高 輪 諸花 (m)	獨 創 輪 諸花		
松江市竹矢町 安國寺唐水塔	1	久	全體	強く外反・单弧	軒厚 はとんど直立	薄 はとんど直立・2弧	無 はとんど直立・2弧落し	有 はとんど直立・2弧落し	有 はとんど直立・2弧落し	2階 2階	無 無	銘文 (1343)	安山岩 ?	1.23	独	
鳥取縣日南町 印置塔	2	腰輪り 先細 單弁	全體	はとんど直立	薄 はとんど直立・2弧	無 はとんど直立・2弧	有 はとんど直立・2弧落し	有 はとんど直立・2弧落し	有 はとんど直立・2弧落し	2階 2階	合掌石 に申弁	正平12 (1358)	花崗岩 ?	2.16	独	
三ノ屋町鶴河内 正福寺塔	3	欠	細腰刻み 单弁	全體	全體 低い	全體 低い・2弧反	有 やや厚	有 やや厚	有 やや厚	2階 2階	合掌石 に複弁	金剛界 西仏	南北朝 ?	同上	現存 1.05	独
松江市枕木町 帝釋寺開山塔	4	短く太く 中間彫 田舎	省略	省略	全階	薄 やや外反気味	無 やや外反氣味	有 やや厚	有 やや厚	2階 2階	無 無	南北朝 ?	同上	0.90	独	
松江市大野町 四光寺要山・大野塔	5	欠	全階	強く折曲・2弧	薄 蓮座	有 蓮座	有 蓮座	有 蓮座	有 蓮座	2階 2階	有 花頭	「ト半手欠く」 むくわる	室町	米特石 0.50	笠まで 対	
三ノ屋町鶴河内 椎ノ木上塔	6	平板状 板状柱狀	区分不明瞭	省階 曲面	強く外反低い 2弧(不明瞭)	極厚 2弧	有 やや強	有 やや強	有 やや厚	2階 2階	無 合掌石	未央曲面 むくわる	桃山	同上	1.21	対
大東町高瀬 牛尾寺嘉塔	7	平板状 板状柱狀	太輪 二重	省階	強く外反強的 1弧	有 やや厚	有 やや厚	有 やや厚	有 やや厚	2階 2階	無 花	「下端を欠く」素地に 蓮花	桃山	同上	解定 1.35~ 1.40	対
(説のみ)																
情田町小馬木 下垣内古墳塔	8	鍔輪状 輪劍柱狀	中間輪なく 太輪二重	省階 斜立	強く外反・1弧 巻込みカスア	無 無	無 無	2階 2階	無 無	無 無	無 無	塊山~ 魔長?	同上	0.60	対	
情田町小馬木 家本家墓塔	9	同上	鍔輪柱狀	同上	強く外反 2弧(模様不明)	同上	無 無	無 無	無 無	江戸初 ?	無	江戸初 ?	同上	0.91	対	
三ノ屋町檜下 鞍桿慈	10	低い 三角輪	中輪のある 鍔輪柱狀	同上	強く外反・1弧 直立	刺点と弱い 強強	同上	有 有	小さく有 身体中繋れ	2階 2階	無 無	慶長	同上	1.12	対	
(説のみ)																
松江市竹矢町 安國寺京極高次塔	11	扁平状 円柱(輪なし)	小花 単弁 反花(傾斜)	金輪 2重輪	強く外反 全輪の弱	やや厚 斜軸	有 有	有 有	有 有	低く 2階	合掌石 車連弁	正平11以降 (1364~)	安山岩 ?	1.63	独	
二反田古墓	12	環状首付 やや先端彫	小花 単弁 反花(傾斜)	金輪 2重輪	強く外反・2弧 悉込みカスア	極厚 強く乗留強	有 有	有 有	有 有	2階 (二重造)	無	素文曲面	白粉石 0.30	対		

図 13 宝鏡印塔の比較(1)

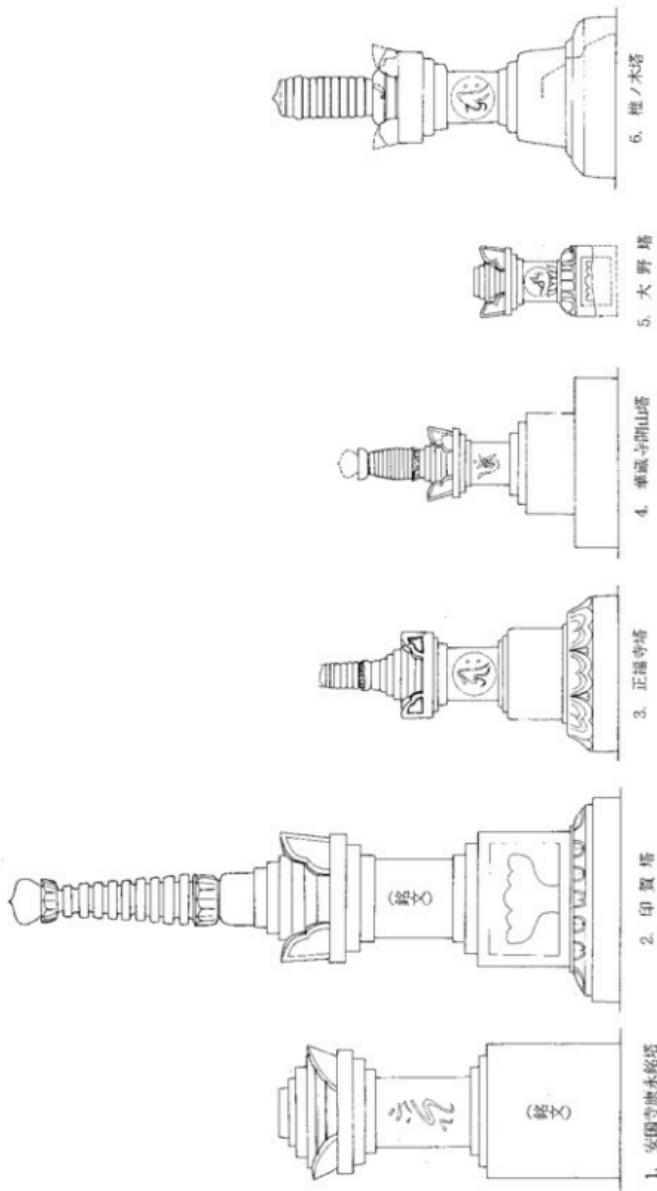
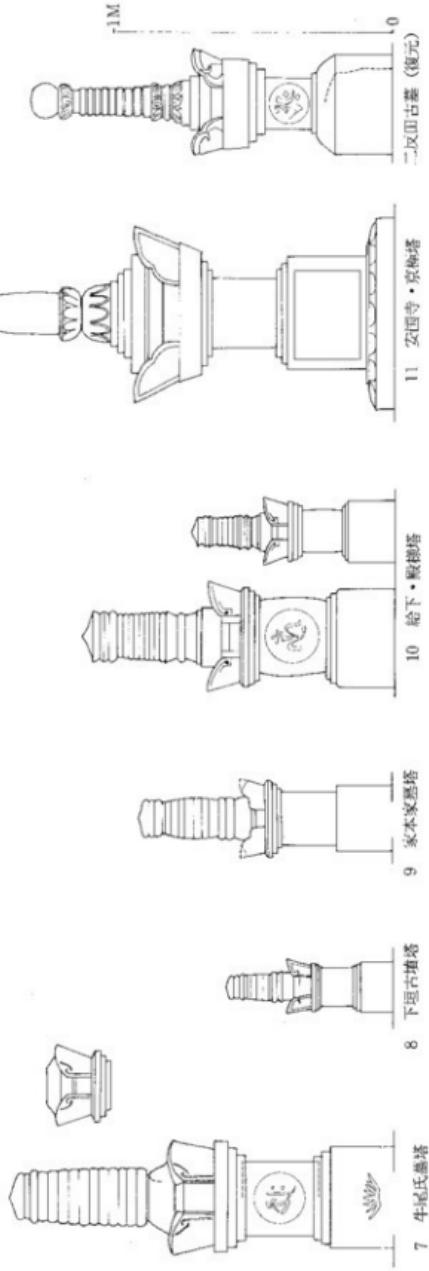


図13 宝篋印塔の比較(2)



現をなくしたものとして注目されよう。

細部についてみると、本来は印賀塔のように伏鉢であるべきものが華藏寺では省略され、中世末の諸塔は簡略な輪としての表現となり、京極塔では反花座となっている。また頂部の宝珠についても端正な宝珠がやがて短円柱状（他例による）を経て中世末には饅頭状又はその頂部にわずかな突起を付けたような形状となる。（但し近世に入ると頂部の尖りが極端に表現されるようになる。）

宝珠の請花は単弁であったが漸次弁刻が省略され、中世末の小塔では輪状にまで変容してしまう。

当該遺跡出土の相輪はやや扁平～球形の宝珠と単弁の請花に受けるもので、九輪は整形で単弁上に立つ。しかし伏鉢は反花となっている。このように相輪の形状はやや整形の部類といえよう。しかし京極塔にも近似しており、一概に古朴であるともいえない。

笠部についてみると、先ず軒上から露盤まで階段をなすのが本来であったが、室町期になり小型化するとともに階段が省略され、単なる斜面をなす省階式になる。但し江戸時代の京極塔では高さの低い全階式となっている。

次いで隅飾突起が注目される。印賀塔・正福寺塔など14世紀ごろの塔ではやや短く、ほとんど直立気味に立ち、弧は2弧で縁どりされている。これが華藏寺塔・大野塔まで下るとやや開き気味となり、2弧の接点が鋭角に尖る（Cusp）。16世紀の小型品では開きが大きくなり、弧は上方の1弧のみでCuspは線に続く丸点で表示されるに止まるようになる。

この中で最も古い年記銘の安国寺康永銘塔の場合は、隅飾突起が短く強く開き、しかも単弧であるなど、年代では印賀塔に極く近いにもかかわらず全く相違している。なお本例と下垣内塔は上弧端が内側に強く巻いて尖り、Cuspとなっている。

軒は概ね階よりやや厚い程度で推移するが、本例と共に椎ノ木上塔と京極塔において極端に厚くなっている。尤も京極塔の場合は軒先を強く斜にした近世的な手法ではある。軒下の階についてはいずれの塔も2階で変化は認められない。

塔身は安国寺康永銘塔が長身であるほかいずれもほとんど正方形をなし、金剛界四仏を多くは月輪内に刻しているが、中世末の小型塔ではこれがみられず、また塔身に膨らみのあるものもある。

梵字種子はいずれも薬研彫りであるが、刷毛書きの書体に差異がある。大野塔では月輪の蓮花で受けている。

基台部についてみると、その下に基礎石を敷くものは多くが独塔で、2階を造って塔身を受けるものでこれには基礎石に反花座を設けている。このような様式は概して古いものにみられるのに対し、大野塔と本例は所謂関西式と呼ばれている様式で、基台上端を階と

せず反花座にし、大野塔は複弁を刻み本例では素文としている。いずれも対をなす塔である。

これら反花座の蓮弁からみると、複弁が古く單弁又は素文はその省略形とみなされる。またその断面形は印賀塔や正福寺塔では優美な曲線であるのに対し、大野塔は強く捲れて室町初期の様相である。

基台側面に格狭間を設けたのは印賀塔と大野塔で、これには蓮実を刻む。安国寺康永銘塔及び京極塔にはここに碑文記年銘を刻している。その他は素地のままである。

基台部はおそらくいずれもが底面から抉り込みがあるものと思われるが、確認したのは椎ノ木塔と本例のみで、前者は基礎が前後組合せ石として中央を抉り、その上に基台の抉りを被るもの、後者は基台部が上下2段重ねて下段が前後2石の組合せで内抉りとなっている。<sup>註21</sup>なお最小である下垣内塔の場合には基台裏に抉りはなかった。

基台の下に基礎を敷かない場合は土壇や石敷基壇の上に建てられているか、或は龕の中に納められている場合でいずれも2塔で1対をなしている。このように対をなす塔は牛尾塔あたりから以降に見られる。

以上塔の各部分について概観したが塔の全姿についてみると、印賀塔は末だ鎌倉末期の作風の遺る堂々たる作で力強いが、正福寺塔・華藏寺塔になると小型でおとなしい姿となり、大野塔へと続くものであろう。主として花崗岩製である。1～2時期をおいて牛尾塔・笠下塔・家本塔など凝灰岩質で、中小の釣合いの悪い便化した一群に移るものとみられる。そしてこの時期は夥しい数が乱立する時で、安土桃山時代から江戸初期への移行の時でもある。そして江戸期へ入ると、笠部の隅飾りや相輪など上半身に誇張がみられ、釣合いが悪くなるが、造立が激減してしまう。

本遺跡出土の二反田塔について以上の諸点を比較すると、特に相輪と笠部では装飾的な面が認められ、伏鉢は反花に、隅鉢突起は外開きでCuspは巻き、軒は厚いなどが指摘される。製作は入念である。笠上は全階式であるが伴う別の破片に省階のものもあり、また九輪の請花や反花に省略のみられるものもある。

これらからして華藏寺塔や大野塔に続くものであり、牛尾塔や椎ノ木塔に対しては先行する時期と考えてよからう。時代としては大まかに室町期後半であり、安土桃山時代には至らないものと考えたい。

註1. 島根県教育庁文化課課長補佐蓮岡法姫氏の紹介により現物について鑑定していただいた。

註2. この安山岩質石材は島根大学理学部地質学教室波那呼大、飯泉謙、山内靖喜氏らの鑑定による

と、やや緑がかった暗色の石材は安山岩溶石で、白っぽさのある同様の岩石は石英安山岩である。これらは中新世中期の大森層に該当し、松江市の南側によくみられ、安来市から松江・山陰へかけて帯状に分布するものとされた。

註3. 密教の金剛界曼荼羅にもとづく金剛界四仏は宝鏡印塔のみならず、宝塔類には多くみられ、梵字種子や仏像を彫刻する場合もある。塔身を主である大日如来（パン）に見立て、西・阿弥陀（キリーク）、南・宝生（タラーク）、東・阿闍（ウーン）、北・不空成就（アク）の四如来を表わしている。

註4. 類似する多数例では本遺跡に近い位置の荒隈城跡出土の一群が挙げられる。

『荒隈城跡』松江市教育委員会 1982

註5. 須恵器について主として次の文献を参考にした。

山本 清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 1971

柳瀬俊一「山陰地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』 1986

註6. 島根県立博物館村上勇氏の教示による。

註7. 出雲地方において紹介された著述としては次のように挙げられる。

1) 伊藤菊之輔『出雲の石造美術』昭和 40 年

2) 原 宏一『野の石』—山陰の石仏めぐり—昭和 59 年

3) 池潤彦助『出雲に於ける五輪塔并に宝鏡印塔尋ね歩記』正統（鷲木）

なお、池潤氏はこの中で 150 か所で五輪塔 352 基、宝鏡印塔 157 基を踏査したと述べている。スナップ写真も多く資料集として貴重であるが公刊されていないのは残念である。

註8. 安国寺康永銘塔 かつて付近の畠地にあったもので、現在同寺前庭に在る。伊藤・池潤氏によって紹介されている。

註9. 華嚴寺開山塔 枕木山に在る古刹華嚴寺の本室脇裏にあって、開山の碑とされている。多数の宝塔・無縫塔・宝鏡印塔類が並ぶ中の最も大きい塔である。伊藤氏によって紹介されている。

註10. 大野塔 西光寺の裏山中腹の墓地にあり、数基の宝鏡印塔と共に並んでいる。本宮山城主大野氏の墓地とされている。

『大野郷土誌』昭和 44 年に紹介されている。

註11. 京極高次塔 安国寺庭に在る。基台の銘は慶長 14 年であるが、堀尾氏のあとへ入部した京極忠高が、父高次菩提のため建てたもので、寛永 11~14（1634~1637）の間に造られたもの・原・伊藤・池潤氏によって紹介されている。

註12. 牛尾氏墓塔 牛尾氏の居城・三笠城跡に對峙する位置にあり、本姓中沢氏が地名をとって牛尾を姓とした。宝鏡印塔が群をなし、その中央 2 基が対をなして特別大型である。

『大東町誌』昭和 46 年、伊藤・池潤氏によって紹介されている。

註13. 正福寺塔 大字殿河内正福寺（屋号）の庭に在る。かつて寺庭があったところで、ほぼ原位置であろう。裏庭には墓地群があり、宝鏡印塔等の破片が多く埋没している。

『殿河内遺跡発掘調査報告』三刀屋町教育委員会 昭和 61 年

註14. 椎ノ木上塔 大字殿河内御城山城跡の麓に在る 2 塔 1 対。

『殿河内遺跡発掘調査報告』三刀屋町教育委員会 昭和 61 年

註15. 殿様墓塔 大字船下向安寺にあり、りっぱな石龕に入った対の塔（大）と近くにある小塔についてみた。伊藤氏により刻年紀天祐とされたが誤りのようである。慶長ごろの造立か。池潤氏の紹介もある。

杉原清一『三刀屋氏とその城跡』三刀屋城跡調査委員会 昭和 60 年

註16. 家本塔 板敷神社下の旧家本家墓地内にあり、墓地一段上に 1 対をなして建つもの。祖靈供養の塔とみられる。

- 註17. 下垣内古墳塔　字下垣内地内畠地にある。下垣内古墳（横穴式石室の奥部が残存）の石室内に1対を安置したもの。開窓に伴って古墳を発見し供養したものとみられる。
- 註18. 鳥取県指定文化財。俗に印賀正平塔とも呼ばれるもので、基壇まで完全に残っている。総高2.4 m。  
塔身正面に銘文が彫られているが摩耗してほとんど読めない。  
「逆修一日□□妙典、十三部供養已畢、正平十二丁酉十月日 一結衆二百□□敬白」  
正平は南朝の年号で1359年であり、文によって逆修の塔である。
- 註19. 宝篋印塔の年代を考えるに際し、主に次の文献を参考にした。  
跡部直治『宝篋印塔』『仏教考古学Ⅱ』雄山閣 昭和45年  
川勝政太郎『石造美術入門』社会思想社 昭和42年  
伊藤菊之輔『出雲の石造美術』昭和40年  
巖津政右衛門『岡山の石造美術』岡山文庫55 昭和55年
- 註20. 蓬岡法障「石見銀山の在銘石塔について」『石見銀山関係資料・関連遺跡分布調査報告』島根県文化財愛護協会 昭和61年において氏は、基壇上部の反花座とその上の段の彫刻（便化した蓮弁文）はこの地方の形式であり、編年上重要（天正、慶長期について）であるとしているが、出雲地方の同期とみられるものについては見当らない。
- 註21. 当地方ではおそらく初見の手法であろう。しかし前註書「宝篋印塔」（仏教考古学Ⅱ）73頁所載図版の覚園寺二世大燈和尚塔は、文にもあるように基台部が上下2石をもって構成されている一つの事例である。

## V. 遺構・遺物の自然科学的検討

### A 二反田古墳焼土熱残留磁気測定結果

時枝克安・伊藤晴明（鳥根大学・理学部）

#### 1. 採取した試料

焼土遺構No.1	焼土:20個
No.5	焼土:13個 焼けた石4個
No.6	焼けた石4個

焼土試料の採取にあたって、焼土の焼成度が低く軟らかいために、プラスチックの小ケース（1辺2.4cm）を土中に打ち込む方法で採取した。

#### 2. 測定結果

焼土試料の熱残留磁気の強度はかなり大きいが、方向が大きく乱れている。また、焼石試料についても同様の結果を得た。方向が乱れる原因について、焼土の場合は、軟らかいので最終焼成後に外的な擾乱を受けたため、また、焼石の場合は、焼け方が甘いため岩石の元々の残留磁気が現われたためと考えられる。従って、残念ながら、年代決定はできない。

焼土についての測定データを添付する。

表6 測定データ表

試料No.	伏角(I)	偏角(D)	試料No.	伏角(I)	偏角(D)
9	27.17°	-30.13°	26	42.26°	-82.34°
10	12.54°	-25.20°	27	41.54°	248.80°
11	4.59°	-24.93°	28	41.29°	228.73°
11	4.59°	-24.93°	29	-30.55°	67.97°
12	23.26°	-49.26°	30	-39.23°	103.21°
13	20.48°	-5.91°	31	39.79°	-89.83°
14	24.95°	8.95°	32	3.39°	-79.88°
15	27.82°	-46.76°	33	6.24°	-61.45°
16	16.18°	-56.21°	34	21.59°	-52.38°
17	31.94°	-32.54°	35	35.29°	-65.75°
18	13.56°	-54.96°	36	21.78°	-54.73°
19	16.96°	-49.90°	37	28.11°	-71.95°
20	26.54°	-42.04°	38	34.06°	-61.35°
21	3.84°	-53.82°	39	37.88°	-81.51°
22	12.44°	-55.05°	40	36.11°	-86.89°
23	5.02°	-57.53°	41	17.55°	-54.12°
24	77.36°	165.14°			
25	36.42°	-65.04°			

## B 二反田古墓の出土火葬骨

鳥取大学医学部法医学教室 井上見孝

出土骨は灰白色ないし白色を呈し、骨の表面には長軸方向に裂開、横方向に亀裂を生じ、その裂け目に沿ってこわれ、著しく収縮しており、すべての骨は破片化し、小骨片化している。

これらの骨は明らかに焼骨であり、骨の特徴的変形から完全焼骨である。<sup>註1</sup>

この焼骨片は同定できる部位は極めて少ないが、その形態学的特徴から明らかに人骨である。

またこれらの焼骨は遺壙の床土が黒褐色に変化しており、周囲の状況からみて火葬骨と考えられる。

全般的に、各遺壙からの出土火葬骨は極めて少なく、完全に骨片化しており、頭骨では一部縫合部があったが、大部分はその部位を特定できない。また四肢骨も同様に小骨片化しており、左右の別が不明である。

それ故に各遺壙から出土火葬骨について、性別・年令は不明である。

各遺壙の出土火葬骨は表7にまとめる。

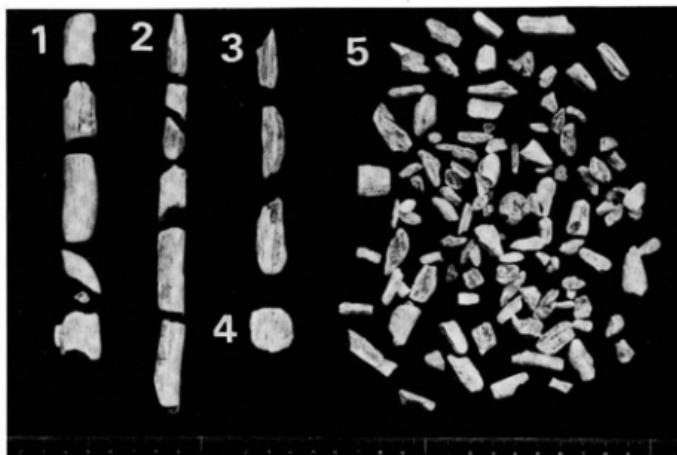
表7 二反田古墓の出土火葬骨

遺壙名	残存骨
SD-3	上腕骨片 肩骨片 尺骨骨片 その他の骨片 膝蓋骨片
SD-4	頭蓋骨片 その他の骨片
SD-5	四肢骨片 その他の骨片 頭蓋骨片 その他の骨片 四肢骨片
SD-6	骨片

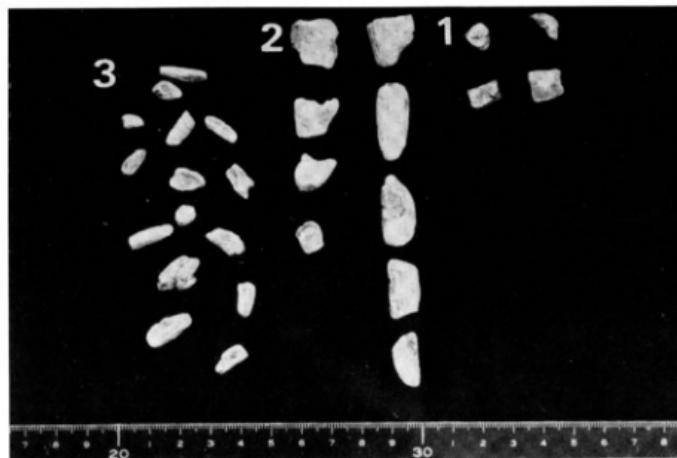
各遺壙からの出土人骨は、その骨の焼け具合から死後まもなくかなり高温で火葬（荼毘）にふされたものと推定される。

註1. 池田次郎 1981 奈良県立橿原考古学研究所編 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第43冊大安萬侶墓 山土火葬骨について

出土火葬骨(1)

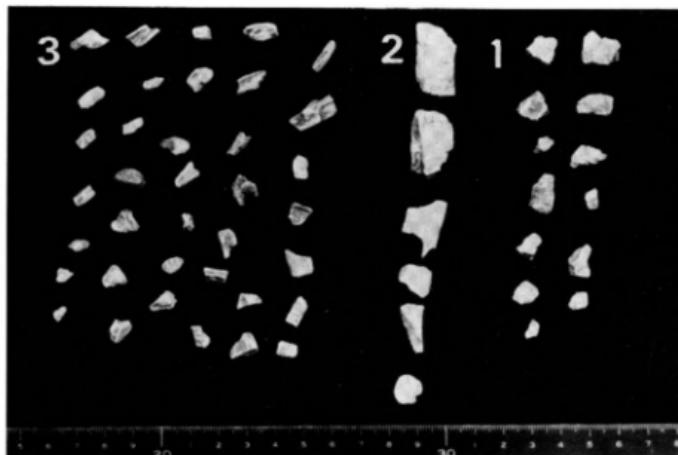


SD-3 1. 上腕骨片 4. 膝蓋骨片  
2. 尺骨骨片 5. その他の骨片  
3. 肋骨片

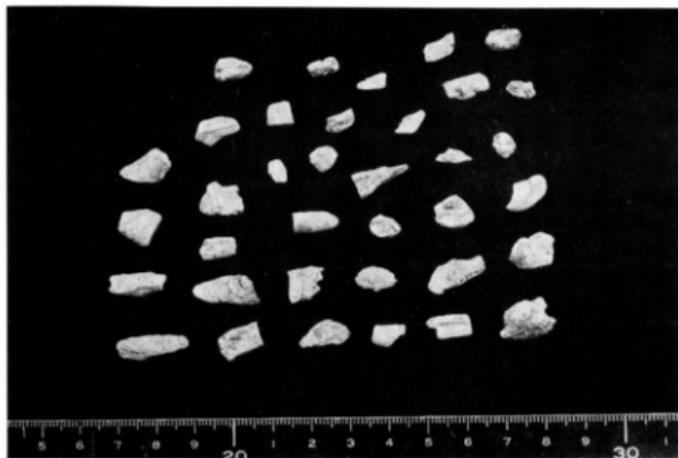


SD-4 1. 頭蓋骨片  
2. 四肢骨片  
3. その他の骨片

出土火葬骨(2)



SD - 5      1. 頭蓋骨片  
                2. 四肢骨片  
                3. その他の骨片



SD - 6      骨片

## C 出土木炭の樹種判定

二反田古墓の火葬場から採取した木炭片で木材の形状を部分的にでも保つものを資料とした。そしてこれを組織構造によって樹種判定をしようとするものである。

一般に木材は炭化によって収縮し、約80%の容積に減するが、組織構造は破壊されることなく原形を保つ。しかしこれを分解して検索することは不能であり、刃物によって切断することも技術的に難点が多く、検鏡用の切片作製には埋材や処理がたいへんである。

さいわいに木炭は折ることにより、破断面（小口面）は多くの場合光沢のある貝殻状を呈し、組織細胞も正しく横切断した場合と同様になり崩壊は微小である。

木材の組織構造をみるのには、小口、柾目、板目の3面について行うべきものであるが、主は横断面である小口面についてであり、柾目、板目についてはその補完となるものである。

木材の小口面には春（早）材と夏（晩）材との互層が年輪となり、導管や仮導管の断面は大小種々の孔構造を示し、細胞膜の肥厚したもの、纖維細胞や髄もみられる。そしてこれらは樹種によって特徴的な配列構成を示すものである。但し木炭の場合は柔繊胞ストランドや色素・タンニン等について識別することはできない。

ここでは資料を横断方向に折った新鮮な小口面について針葉樹と広葉樹に区分し、肉眼及びルーペで観察し、検索表によって探索した。

以上の結果から樹種別に資料をみると、針葉樹ではクロマツが最も多く、次いでスギであり、その他は認められない。広葉樹では多くの種類が認められるが、俗に謂うところの「雜木」であり「堅木」が多い。

全体として若令の針葉樹（特にマツ）が多く、広葉樹は多種にわたるがいずれも枝条部分程度の小径であった。

この結果からみると現今の松江市近郊での雜木林の植生に近い構成であり、それもすべてせいぜい10年生前後までのがれ木であるとみられる。

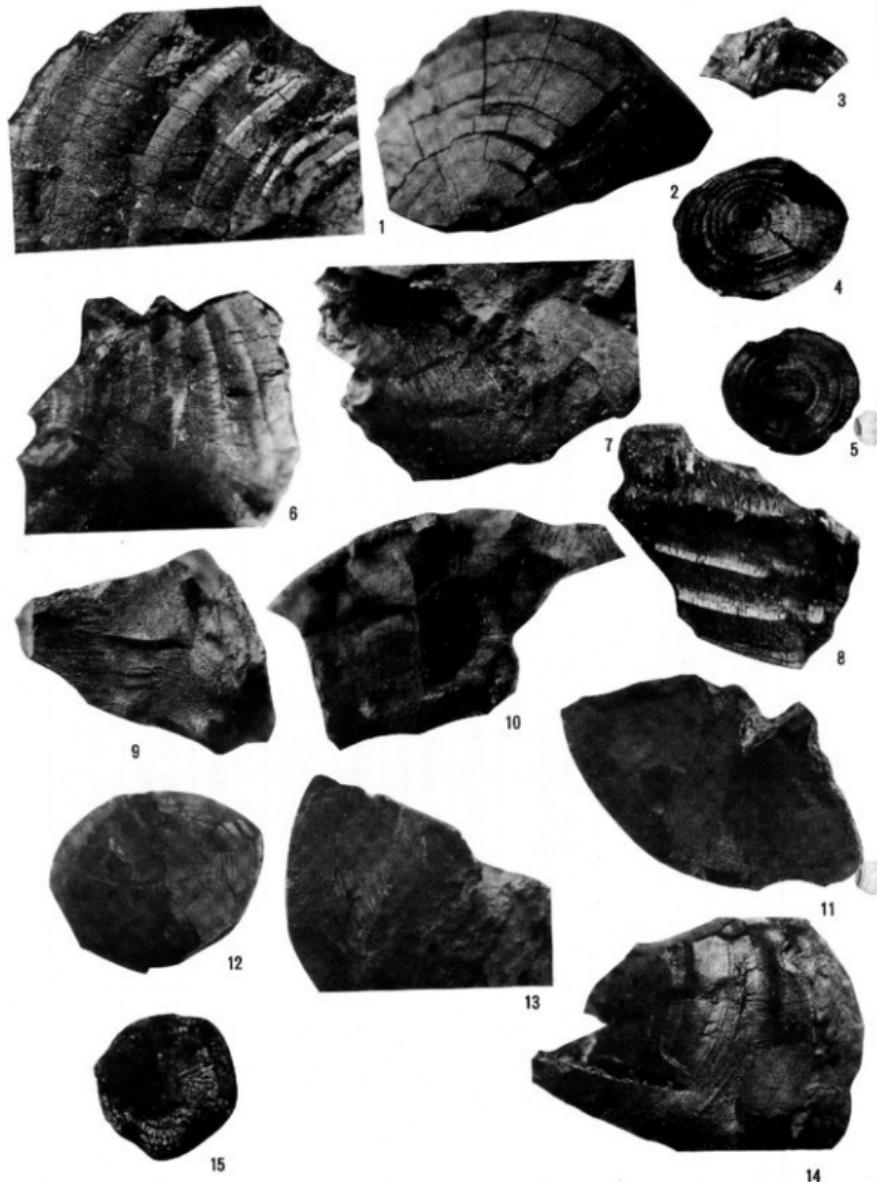
（杉原清一）

註1. 烏地謙『木材解剖図説』地球社 1976

2. 貴鳥恒夫・他 「木材の識別」「原色木材大図鑑」保育社 昭和55年

表8 木族の観察

区分	資料	図版No.	小口面前の観察	樹種名
針葉樹	S D 2 - 1	1	木理は粗。樹脂道は大きく夏材から春材側生部に散在する。	クロマツ
	S D 5 N - 2	2	木理は粗。樹脂道は急。(水半ぬ道については未確認)	
	S D 3	3	(3)は幼令木。(6)は小枝。板導管は均質で整列する。	
	S D 5 S - 1	4		
	S D 6	5		
	S D 3 - 1	6	木理は粗。樹脂道なし。春材部は厚く夏材部へは漸移する。	スギ
広葉樹	S D 2	7	夏材部内側に櫛孔状にみられるのは柔細胞ストランドであろう。	
	S D 5 S - 2	8		
	S D 5 N - 1	9	木理や粗。櫛孔材。夏材外側に太い導管が3~5列めぐる。側腺は微細。	ネムノキ
	S D 3 - 3	10	木理は密。散孔材。放射組織は微細。微小な導管は全面に分布し木織維は密。春材は薄く小孔グループあり。夏材への移行は急。	ツバキ
	S D 5 S - 3	11	木理は密。散孔材。放射組織は微細たが射線。導管は極めて微細。	ヤマザクラ
	S D 5 S - 4	12	木理は密。散孔材。放射組織は極く微細でルーペ的。導管も同様に極く微細。夏材部はほぼ1層。堅木	マンサク
被	S D 5 S - 5	13	木理やや密。散孔材。放射組織は極く微細ではほとんど認め難く均質である。導管は極く微細。	ノリウツギ
	S D 6 - 1	14	木理はやや粗。散孔材。放射組織は微細でやや不明瞭。組織は緻密で均質。導管は極く微細で全面に散布。	カシ類
	S D 5 S - 7	15	木理はやや粗。放射射材。厚い夏材部にある導管は放射状で、また分岐して火炎状をなす。その他の導管は極く微細で認め難い。	サカキ



木炭の小口面

## VII. まとめ

この二反田古墳は火葬場の並ぶ第2テラスとその上方に設けられた石敷基壇の遺構があり、そこに散乱していた石塔は宝篋印塔であった。

火葬場は薄い表土を除くと輪郭の不明瞭な壘状の暗色部分がほぼ1.3m間隔に並んでおり、地山面では明瞭な掘り込みSD1～SD6を認めた。いずれも真黒な炭灰が詰っており、焼けた石が投入されており、火熱を受けた人骨の細片がそれぞれ採取された。これによって火葬場と判明したのである。

各壘によつて若干の差異はあるが、70×90cm程度の長方形で、深さは地山面下12～15cm程度の掘り込みである。この壘は例えばSD6のように壘底に2個の石を据えて粗朶を置き地上に付近から伐採した枝木を積み上げて茶毬に付したものとみられ、遺構としては最下部である炭灰の詰った小さな土壤と焼石片が残ることになるのであらう。用いられた薪材は、炭片からみると松・杉のはかネム、ツバキ、ヤマザクラ、マンサク、ウツギ、カシ、サカキなど広葉樹のあまり大きくないものであり、現場付近に普通にみられる植生である。また焼けた壘内面について別途に考古学磁気年代も測定したが、年代判定にまでは至らなかつた。従つてこれら各壘の年代順については把握できなかつたが、遺構はすべて同一の手法様相であり、あまり時代的差はないものと思われる。

各壘の間隔は1.1～1.5m程度であり、また上層土の壘状暗色部分は直径約1.5～2.0mであることからして、それぞれの壘は同時に行われたものではないと思われる。

一方その上段に位置する基壇遺構についてみる。地形の等高線に沿つて設けた狭小な削平段に、推定幅90cmほどで長さ20mもの1列の石敷基壇がある。前後に20～30cm程度の縁石を並べて置き、中に小甕を敷いたもので、2.0～2.5m毎に縁石同様の石を数個置いて区画されている。この区画のプランからみて、上段テラスで4期9区画、下段テラスにも1期2区画がよみとれる。この基壇上に散乱する右塔片の石材や様式からして、第1テラスの中央部分2区画が先ず敷設され、次いでその両側各3区画が、さらに西端部の短い1区画が順次設けられたとみられる。さらに第1テラスにスペースがなくなったため、第2テラスの東端に2区画が追加されたと判断される。尤も第1テラスについてその削平は、分割してではなく全面を一挙に整地したものとみられる。

この石敷基壇には下部に何らの構造も認められず、埋納等はなかったものと思われた。

調査された石敷基壇の類似例を擧げると、例えば広島県で高田郡八千代町土師の各古墓群<sup>註1</sup>や、佐伯郡吉和村妙音寺遺跡・辻山遺跡などがある。しかしこれらの多くは縁石を2段～数段積み上げた石積基壇としていること、五輪塔もあること、及び埋納施設のあるものも

あることなど、細かくみれば相異する点が数えられるが、蹠の敷き詰め、区画の様相、塔の類似性、また塔が対をなす構成であることなど、手法・構成など原則的には近いものと思われる。

石塔についてみると、出土した破片はすべて宝篋印塔であり、上記例のように五輪塔を混じえたものではなかった。出土した破片数からして総数は14基以上であるとみられ、第9～11区画のものがやや後出するほかほとんど同一の様式・寸法であるとみられる。

出土した宝篋印塔はこの地方としては入念な作風で全階式ではあるが、隅飾突起のカスプや伏鉢の反花への変容或は省略化など時代を反映しており、全体として笠・相輪に誇張がみられることから、室町時代後半期の製作とみてよからう。

本来宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼經に基づく経塔の一種であり、平安時代以降国内に建立された。鎌倉期以降五輪塔とともに墓塔としても用いられ、僧から武士層へと墓塔として用いられるようになった。そして右塔内には抉りがあり、かつての納経から納骨へと変化<sup>註3</sup>したといわれている。とは言え、總て墓塔となってしまったのではなく、供養塔としてもしばしばみられるところであり、武士団の出陣に先だつ逆修の塔として建てられた印賀塔<sup>註4</sup>の如きも存在する。

墓塔としてそれまでの五輪塔を凌いで多く造立されたのは、南北朝期後半から室町中期<sup>註5</sup>のころと言われ、ために粗製乱造となり、小型化し、塔姿も誇略形骸化したと説かれている。

当地方にあっては古塔は数が少ないがほとんど独塔で、格別の修法式に伴うと思われるもので、花崗岩質がそれである。それがやがて戦国時代を経て安土桃山期には、極く小型の凝灰岩質材を用いて太く短い相輪の簡略粗悪な塔となっているが、塔の数は極めて多数造立された。しかもほとんどが墓塔又は祖靈供養塔として2基1対を単位としている。この風潮は江戸時代初期まで続くものの、以降はほとんど墓塔としては用いなくなるようである。二反田古墓の塔はあたかもこの質的な変換点の時期に相当するものとみられ、形姿や造塔様式に過渡的な様相が観取される。

以上の諸点を踏まえて二反田古墓の塔をみると、塔基台部に内抉りした空間は明らかに納骨のための施設であり、それは下段削平地で茶毬にふされた遺骨の収納の目的であったであろう。これはまた墓壇の下部に埋納施設をみないことと符合する。即ち茶毬にふされた遺骨はその上方に設けた右敷基壇の小蹠敷きの部分に安置され、それを被うように基台を掘えて宝篋印塔を建て、1対をもって単位としたものと考えられる。<sup>註6</sup>

発掘した遺構はしかし、この塔が人為的に完全破壊された姿であり、特に基台部分は跡かたもないほどの激しいものであった。この意味するところは何であるのか、全く想像の

域を出ないものであるが、シンボルとしての塔を破壊し、納骨を収奪することが目的であるとすれば、被葬者に敵対するものの手によるもので、戦乱によるのか、或は仏家とすれば宗教上の対立者であったのであろうか。いずれにしても被葬者は当時の概念からして、上級武士か僧籍の人々であり、葬制からして一族の人々であったと思われる。塁城の構えや規模からみても地域の主導的立場の人々であろうことは肯ける。

この墓について中世の記録は見当らず、またそれらの多くを書きとめている「雲陽誌」にも全く記載がない。これほどの墳墓でありながら記述のないことも不思議の一である。

調査地点は常福寺のすぐ裏山下手にあたる位置であり、中世の所謂尼子十旗のひとつである白髮城の南東麓で、その地域内である。時に、常福寺には僧僧不<sup>普</sup><sup>トム</sup>門西堂（城主松田左近の弟）があって、このあたりに「取出の丸」である「常福寺丸」を築いて応戦<sup>註9</sup>したと記述している。常福寺はその後江戸時代に入って現在地に再建され、常福寺丸の砦跡も特定し難いが、極めて近い丘陵上と思われる。そして白髮城攻略のために毛利が築いた向城の真山城はこの調査地点から稜線沿いに北へ遡った頂部に在る。多くの軍記に登場する永禄6年(1563)白髮城攻防戦はまさにこの地点を中心にして繰りひろげられたのである。

二反田古墓の石塔群が破壊された状況は徹底的であり、極めて異状な事態によって行なわれたものとみられ、地域の中世史上格別の意味を有するものと思われるが、発掘調査の限りではこれを明快に解明することはできなかった。この徹底破壊の目的は、その破損状況からみて納封された遺骨にあるとみられることから、上記の戦乱に伴うものであるのか、或は深い怨恨によるものであるのか、いずれにしても常軌を逸した所業である。

さらに付記するならば、法吉町在住の郷土史家小川真登氏の大胆な推理も傾聴すべきものと思われる。即ち、時の白髮城主松田誠保、常福寺住職不門西堂の兄弟は、備前国邑久の金河城を出自とするものであるとしての推理である。岡山県邑久地方は、法華宗不施不受派の西岡弘通の一拠点であったため、その地を本拠とした松田氏一族（今日でも邑久町には松田姓が多く居住している）は、いうまでもなく熱烈な法華信者であったとみなされる。これが尼子氏と姻を結び白髮城に移ったものとすれば、当然猛者僧であった弟の不門西堂は法華宗の持持者であり、以前の常福寺は他宗であったことであろうから、これを折伏改宗せしめて入山したことであろう。特に法華宗不施不受派の折伏は周知のようなものであり、この法華改宗に伴って以前の偶像等を一切破却したのではなかろうか。そしてその一つが、かつての常福寺に深く関わる一族の塁城であった此所を、特にそのシンボルである宝篋印塔を破壊したものとし、さらにもし尼子毛利合戦によるものとすれば、毛利直属軍の仕打ちの先例には全く相反する仕業であり、あり得ないこととしている。

ともあれ、二反田古墓は室町後半期から安土桃山期にかかる限定された一時期の古墓で、すべて茶毘にふして宝篋印塔に納める權力者一族の墳域であり、あまり時期を経ない或る日突然に完全破壊されたものであろう。そしてこの事件は、地域の中世史上かなり重要な出来事の一つとして挙げられるべきものであったと思われるが、口伝や記録は全く見当たらず、故意に抹殺されたものであろうか。

それにしてもこの二反田古墓は、中世出雲地方での葬送・墓制について、火葬や塔への納骨、墓塔としての宝篋印塔の造立と構成、墳域の立地と構えなど、重要な資料を提示するものといえよう。

註 1. 『土師』—土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告—土師埋蔵文化財発掘調査団 1970

註 2. 『妙音寺遺跡』『込山遺跡』『中國綱貫白動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (4)』

広島県教育委員会 1983

註 3. 緒部直治「宝篋印塔」『仏教考古学 II』雄山閣 昭和 45 年

註 4. IV 註 18 参照

註 5. V 註 3 参照

註 6. 伊藤菊之輔『出雲の石造美術』昭和 40 年

及び V 註 3 参照

註 7. 筆者の実見した他の例にも多い。

また IV 註 7 (3) 参照

註 8. これの基本的な考え方はすでに鎌倉時代の諸資料にみられ、(HH 中久夫「納骨の風習の成立過程に関する考察」『現代のエスプリ No. 111』—葬送儀礼—S 51)・国宝絵巻「餓鬼草紙」の埴草の図にも描かれている。

註 9. 常福寺について古文書の一つに次のように記している。

「鳥根郡法吉村白龍山常福寺印記書出」(—宝暦十四正月—)

— 梶井 記日

世傳本山素在白鹿城内其后與城敗績而為一小寺里民如今称基施請常福寺丸云至三世中興頼辨  
視篆之或為法輪永建立地遂起修造之功突延享元甲子歲也 (以下略)

(前略) 尤當寺之儀白鹿時代之古寺に者候江共縁起又者古代之撫札等茂無之 開基等茂知不申  
候起立年代何百年ニ相成候哉記篆茂無之 — (以下略)

註 10. 『島根県史第 7 卷』復刻本 名著出版 昭和 47 年 447 頁～

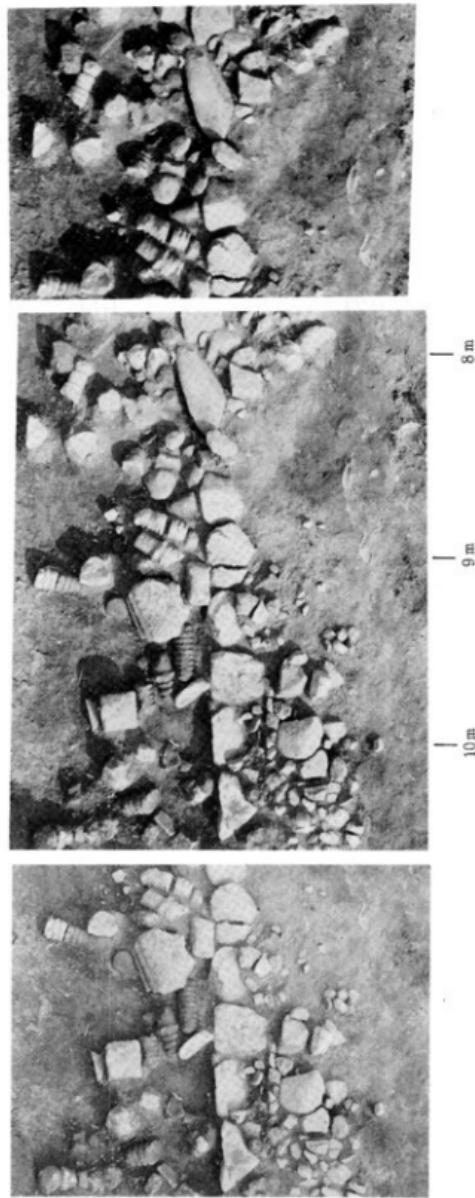
III 註 1 参照

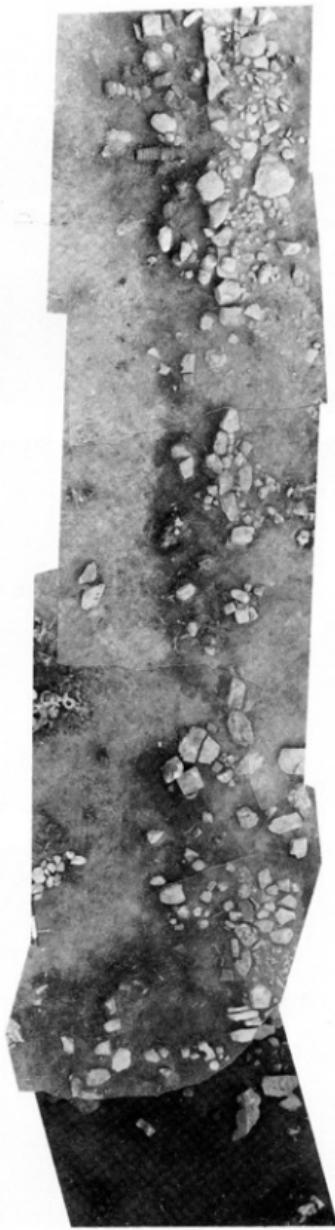
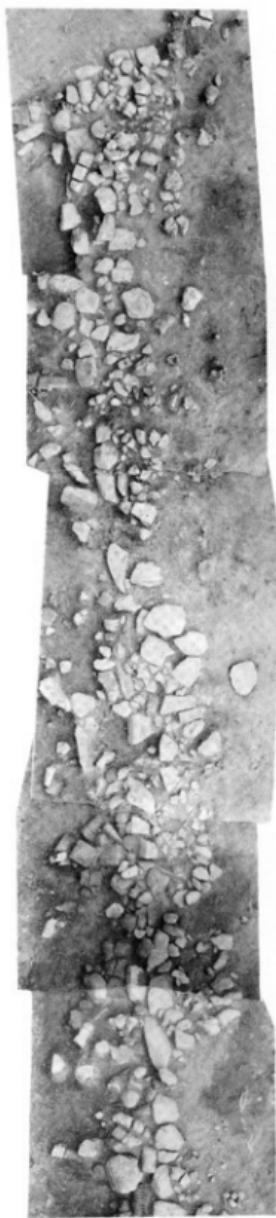
『雲陽軍実記』—白髮城二之城ノ大合戦—復刻本 昭和 48 年 100 頁

『陰徳太平記』卷 36・37 復刻本 昭和 48 年

註 11. 松本 興『続尼子時代史探訪』—安来の歴史第九卷—昭和 50 年

# 図 版





第1 テラス基壇全景 (手前写真)

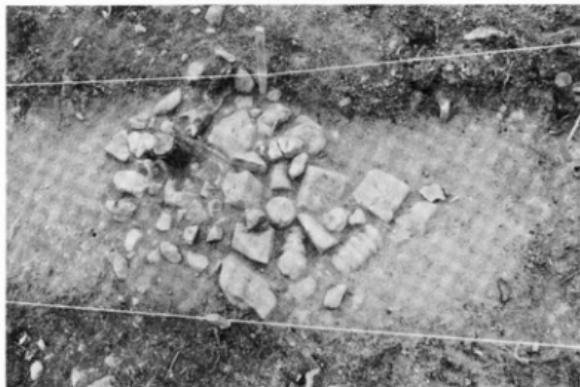
P L 3



遺跡近景



南斜面 トレンチ状況



同 上（部分）

作業風景



第1テラス東端部



第1テラス石敷基壇





第1テラス基壇部  
トレンチ



第2テラス基壇部  
トレンチ



現地説明会

第2テラス  
火葬場上面  
(北から)



第2テラス発掘作業



第2テラス火葬場(北から)  
(完掘状況)



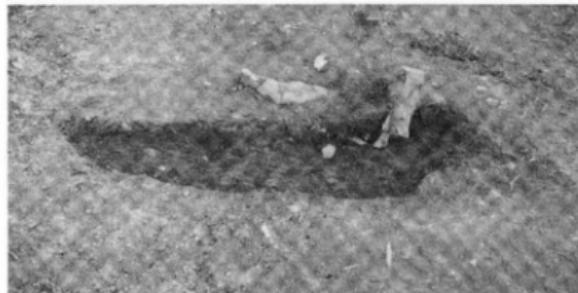
PL 7



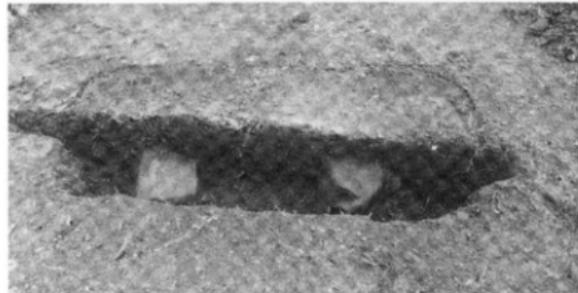
SD - 1



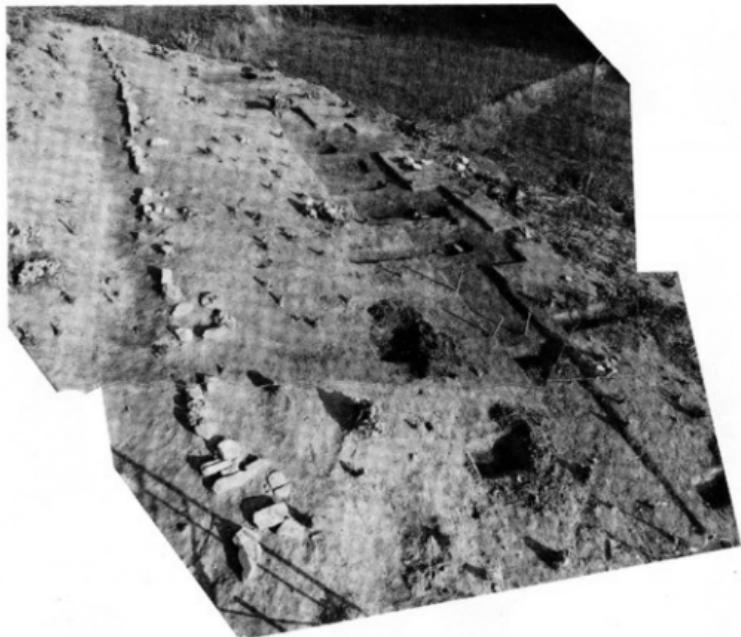
SD - 3



SD - 5S



SD - 6



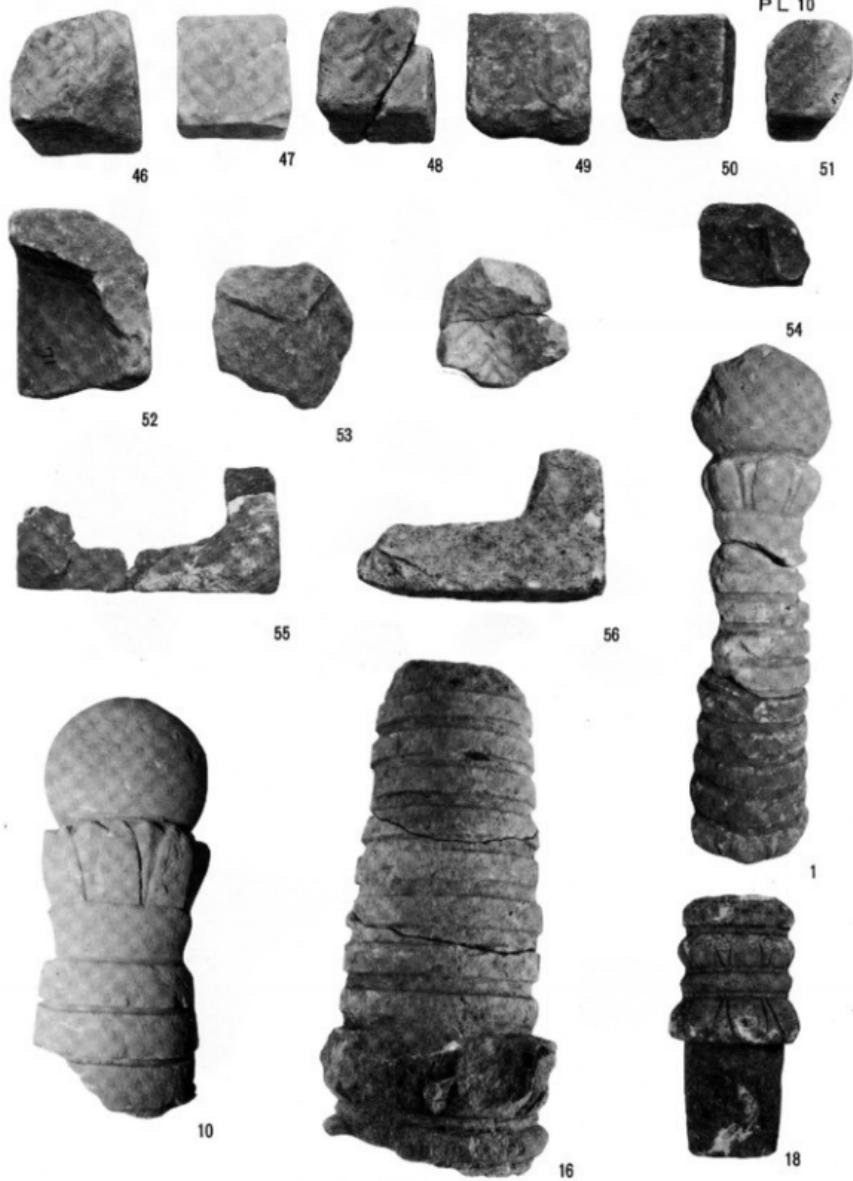
遺構全景（西から）



熱残留磁気測定の  
資料採取



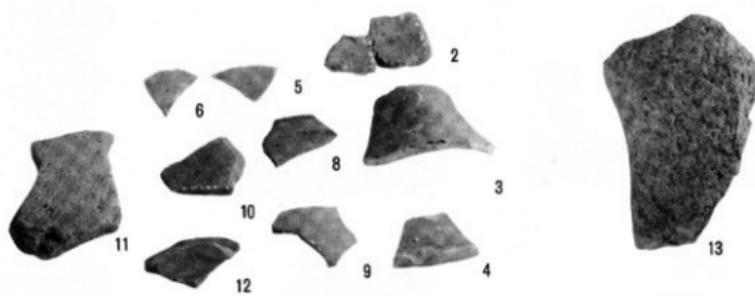
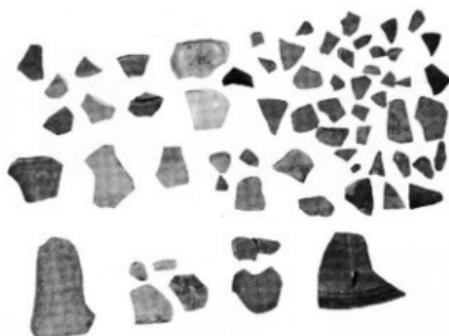
石塔片(1) (挿図番号と同じ)



石塔片(2) (搜図番号と同じ)



1



11

12

10

9

8

6

5

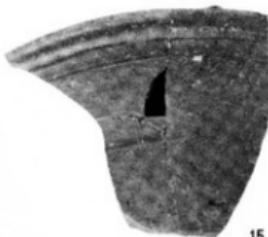
2

3

13



14



15

出 土 土 器 (挿図番号と同じ)

## 二反田古墓

昭和62年3月発行

発 行 松江市教育委員会

印 刷 有限会社 谷口印刷

松江市母衣町89